

夢の

中野区公益活動助成事業

「こども・まち・アート」交流見本市

キッズミュージアム

2007

2007年 3.24 (土) 25 (日)



特定非営利活動法人 **ZERO キッズ**

目次



	(頁)
<本篇>	
夢のキッズミュージアムへ (佐々木 香).....	1
案内人からのささやかな提言 (中埜 博).....	2
事業の趣旨と目的	4
事業概要 (1) 実施日時	6
(2) 実施場所	
(3) 対象者・参加協力団体一覧	
(4) 内容と方法	8
・事前準備	
・当日の様子	
(5) 実施体制	
「こども・まち・アート」フォーラム 要旨	12
事業の成果	14
今後の展開	15

<資料篇>

資料 1：こども会議 (11/12 ワークショップ) 風景	17
資料 2：こども会議 (11/12 ワークショップ) 進行	18
資料 3：こども会議 (12/23 ワークショップ) 進行	21
資料 4：ワークショップからデザインされた会場案	23
資料 5：参加協力団体への呼びかけ	27
資料 6：参加協力団体のスケジュール	28
資料 7：感想から	
・参加者の感想	29
・子どもたちの感想	30
・従事者の感想	32
資料 8：フォーラム講師プロフィール	33
資料 9：「こども・まち・アート」フォーラム抄録	34
資料 10：クロージングライブ	47
資料 11：ZERO キッズプロフィール	48



★別添資料 DVD 「夢のキッズミュージアム 2007」映像資料

①シティテレビ中野放映「予告」1/31、3/12 ②子ども放送局放映「キッズレポーター」4/14

夢の

キッズミュージアムへ

本篇



今回は、私たち ZERO キッズの「夢のキッズミュージアム」を二日間だけ仮設してみました。あの殺風景な、かなり古びた ZERO 西館の美術ギャラリーが、森に、カフェに、遊園地に変身しました。その変身ぶりは、来た人みんなが「えっ！これが！」と驚くほどでした。

この場所をデザインするにあたっては、こどもたちが最初から関わりました。はじめは全くの夢を描いているだけとみんな思っていました。とにかく自由に、思うままに自分の中の夢を絵の中に表現しました。模型を作った時にも、大人や中学生たちは、ほんとにできるのか？と聞いていたと思います。素直に夢の実現を信じ、夢をふくらませたのは、小さい子たちでした。

準備が始まり、まず大きな木の骨組みができました。中央の柱から放射線状に張りめぐらせたワイヤーに、水道管の周りに巻く保温チューブをつけて木の幹をつくる・・・葉をつければ木らしくなるかとつけていくが、まるで洗濯物がぶら下がっているみたい・・・

入れ替わり、立ち替わり、大勢の手が入り、葉が増え、様々なアイディアを出して形にしていくうちに、まるで本物の大きな木が生えているような森ができました。土台を作ってくれた大工さんや学生さん、お父さんお母さんやボランティアは、こどもたちの夢をなんとか実現させたいと、ここまでやるかというほどに真剣に考え、陰で支え、時間と知恵と力を使いました。会場の葉の数は何千枚になったでしょうか。あの葉を作るために、夜になると家族総出で布や紙の葉を切っていた姿を想像してみてください。

準備期間中、こどもたちは学校が終わると会場にかけつけました。制服のままジャージ持参で来る子もいました。はじめは余裕で遊びながらの作業でした。お化け屋敷では自分たちの衣装に夢中、毎日コスプレ大会です。作業はなかなか進みません。大人がおしりをたたけば早いかもしれませんが、このダラダラした時間もまた大切なのです。好きな音楽をかけながら、お菓子を食べながら、自由にのんびり作業です。五日間の準備期間中の三日目を過ぎた頃から、真剣に黙々と作業する姿が見られるようになりました。キッズコースターの乗り物の微妙な角度や装飾にも最後までこだわりました。お客さんへの案内板や誘導表示を作ることに気がつきました。役割分担もしっかりして、お母さんたちのキッズカフェの手伝いにも積極的に名乗りをあげました。部活で来られない高校生が切り文字の案内を家で作ってくれたり、皆の気持ちが自分たちの楽しみから、お客さんを楽しませることに向いていきました。



そして迎えた当日、思った以上の大盛況にてんやわんやしなながらも、皆、目が輝いています。ブースに座る参加団体の大人も子どももお客さんたちも笑顔です。この森の中はまさに異次元空間、善意のあふれる世界です。こどもがこどもに積極的に声をかけています。生き生きと動き回り、働いています。それを見守るお母さんお父さんの顔にも嬉しそうな笑みがこぼれています。

このイベントで私たちが実証したかったことは、「こどもたちが自分たちで考えて自分の手でつくる居場所」は実現できるのだということです。もちろんそれにはたくさんの大人の手と心が必要ですし、目に見えないところにプロの手も必要です。そして、「こどもの参画」を実現するためには、大人たちの忍耐と意志力、計画性が基になります。

私たち ZERO キッズは、今まで行ってきた創作ミュージカルで「こどもたちと創る」ことを続けてきました。「こどもの参画」を実現するためには、大人にはたくさんの労力が必要ですが、それを補って余りあるこどもたちの「達成感」「喜び」「笑顔」が返ってきます。それは未来へつなぐ生命の輝きであり、喜びです。

大人の価値観のお仕着せでない「こどもたちの場所」、こどもたちが自分たちで考えて自分の手で創る「こどもたちの場所」を、私たちはこれからも創り続けたいと思っています。そのためには、より広くネットワークをつないでいくことが課題です。そのためにも「アート之力」を最大限活用して大人の気持ちをつないでいくこと、「アート之力」により平和への祈りや未来に向かう希望を共に発信していくことを続けていきたいと思えます。

最後になりましたが、「夢のキッズミュージアム 2007」の実現にあたり始まりからご助力いただいた中埜先生、設営にご協力いただいた中村さん、参加団体はじめたくさんの皆様、お菓子や布、印刷に協賛いただいた企業の皆様、中野区公益活動として助成いただいた中野区に心から感謝を申し上げます。

「夢のキッズミュージアム」がいつか中野に常設できることを願って・・・

2007年4月

ZERO キッズ

代表 佐々木 香



人気のキッズコースター

楽しい交流の森



キッズカフェでのパフォーマンス

1. 最初の提言は、この報告書を、販売すべきです。

子供の夢は、どんなもので、どんな風にして、実現するか、チルドレンミュージアムの考え方、NPOのかかわりかたの一步としての体験版のノウハウが出ているからと言う宣伝文句で。実際の作成実費分での報告書を分けてあげるといって売りましょう。(ここを読んでいる方は、この提言が実現しているか分かっているでしょうけど・・・)

2. 次の提言は、ゼロキッズの活動はどうしても、「キッズミュージアム」に結びついていかなければならないということです。

ゼロキッズ活動の目的って何でしょう？児童保育の延長、学外補修授業、児童ミュージカル自主上演ボランティア活動、子供ワークショップを継続するNPOでしょうか？どれも違います。子供たちが自分たちの世界を自分たちで創造することで、自分は何であるかを発見する「場」の提供することなのです。その場として、ミュージカルがあり、ワークショップがあるのです。どうして、そんなことが必要なのでしょうか？それは、現代社会の病である「家族の崩壊」のためです。子供を育てる力は、家族ではないのです。こどもを育てることが、家族だけでは、かなり困難な時代なのです。理由ははっきり、わかりませんが、子供たちが自分を知っていくためには、子供たち自身つまり、友達・仲間が必要なのです。子供たちは仲間である子供たちとのコミュニケーションによって、一番学んで育っていくのです。そういうコミュニケーションの「場」の提供こそ、キッズの活動の一番の目標です。それは、学校という、上からのお仕着せだけでは、不十分なのです。大げさに言えば、24時間体制で子供を受け止めていく「場」が必要です。それを、「キッズミュージアム」という名前で呼んでいるだけです。

3. 次の提言は、今回の成功の熱が冷めないうちに、直ぐ実現できるキッズミュージアムの実現に繋がることに取りくむことです。それは、「キッズママ・カフェ」でしょう。

小さいスペースで、日常的に子供が、滞留できる。その管理条件は、毎日誰かが(キッズママが)、責任を持ってカフェを当番することです。しかし、これは、小学校の校庭当番とは、全く違います。ここへは、来るのが楽しい場所にしなければなりません。むしろ、毎日違うことが起こって、コーヒーをのんで、おしゃべりをして、子供たちは子供たちで、自分たちの活動を継続していく。NPOの活動発表をする人もいる。そういう、子供と大人が独自に楽しみを持てる場としていくのです。時には、印刷を手伝って貰ったり、いっしょに、習い事をしたりする場です。今までと

違うのは、いままで、受け身に手伝ってきたキッズママが自分たちで考え、工夫して、カフェという場を盛り上げ、その運営費の一部を稼ぎ出す事です。なんでもいいですから起業して、試行錯誤ですすめればいいのです。ただ、一つの条件は、家賃が安くなければなりません。そうでなければ、カフェの成功は至難です。この場の提供こそ、行政が協力して欲しいところです。（行政はお金をだす必要はありません。場を貸してくればいいのです。）それこそ、キッズママ歌声喫茶の日とか、キッズママ自慢手料理の日、本物のアジア料理の日、キッズママ・バーの日（6歳未満おあづけの日）、キッズパパの演奏の日、30日間一杯のスケジュールをたてて、管理しなければいけません。（1週間に何日でもいいかな？）キッズカフェの飾り付けがまだ残っているうちに、実現しましょう。

4. 最後の提言は、「キッズユニオン」です。

これは、組合の一種ですが、本名は「起業組合」って言います。難しくありません。これは、資本投資金を募集して(200万円位でしょうか)、コミュニティビジネスを起こすために作る組織です。成功した(人件費がただのビジネスで失敗するのは難しいんですから心配しないで下さい)暁には、配当金として投資家に返却していくこともできます。(3年後位)

このユニオンは、指定管理者の資格がとれるのです。スペースを管理できることが、「キッズミュージアム」管理者の最低条件ですから、キッズママ・カフェ運営と結びつけて、有志でゼロキッズのNPOの平行組織として起こしましょう。（ほとんどのキッズ会員が協力会員のままでいいですから。）今のままで、キッズ活動を継続していくために助成金に頼っていくことでは、毎年手続きが大変です。これから行政の支援をひきだしていくには、キッズ自身が管理者として力があることを、行政が認めざるを得ない状況にしていかなければなりません。そうでなければ、キッズの活動は、翼のない巣離れできない子供の鳥といつまでも思われることでしょう。今回のイベントは、その巣立ちができることを、見せることができた一歩ですから。

さあ、もう一度、あのキッズミュージアムに目を輝かしていた子供たちを思い出して下さい。本当に、かれらの生命が輝いていたじゃありませんか？もっと、もっと、生命を輝かせましょう、私たちも一緒に。

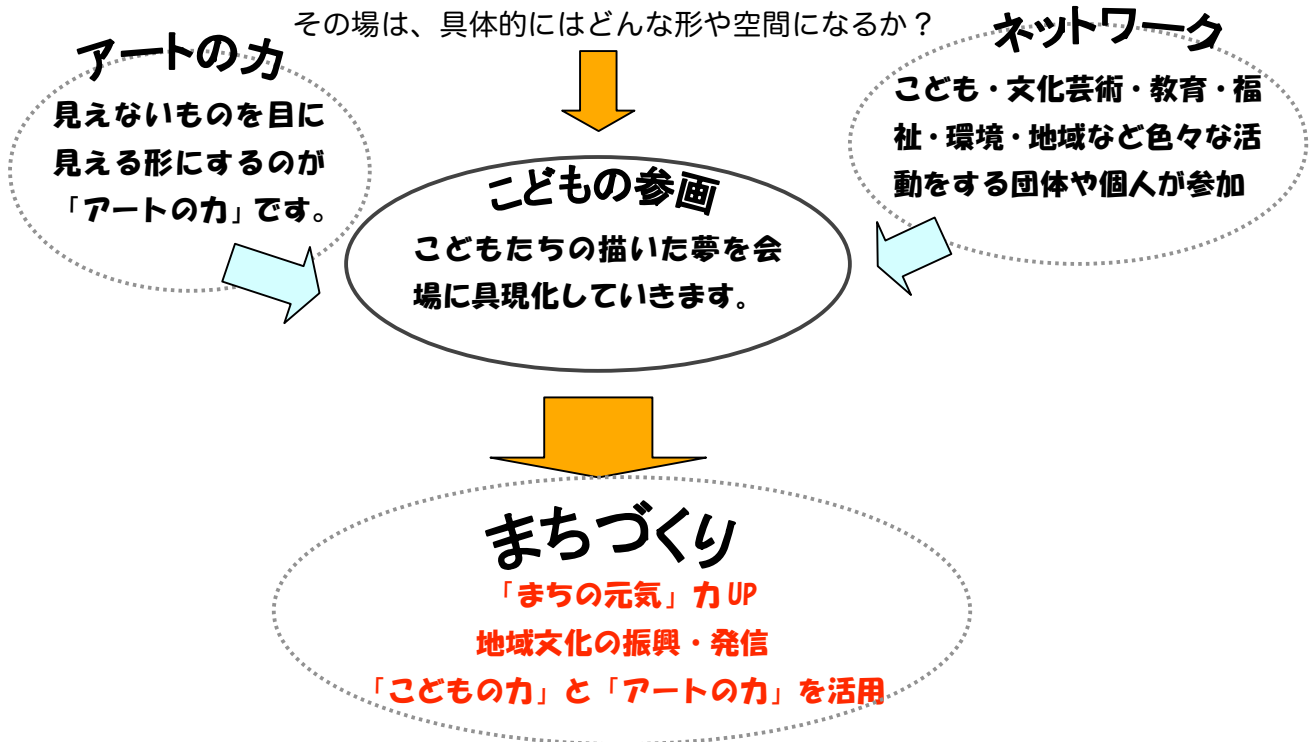


事業の趣旨と目的

キーワードは

「こどもの参画」「アートのカ」「ネットワーク」
を「まちづくり」へ

こどもたちの、こどもたちによる、
こどもたちのための拠点とは、どんな場であるのか？
その場は、具体的にはどんな形や空間になるか？



<イベント開催にあたって>

今回の「夢のキッズミュージアム」では、

- ① 中野のまち、そして各地で「まち・こども・アート」にかかわるグループが出合い、お互いを知る場をつくります。「共有の場」づくり、一緒につくることからネットワークづくりにつなげます。
- ② 「こども」の持っている力に着目し、こどもの参画により「こども」の力をまちづくりに活かすことを提案します。
- ③ 「こども」に向ける大人の温かい視線を未来に向けていきます。
- ④ 「芸術文化」により世界中の人たちの幸せや平和への祈りを発信し、実現に向けて前進していきます。
- ⑤ こどもたちにとってよりよい時間と空間、仲間のある環境を創っていきます。

事業概要



主催：特定非営利活動法人 ZERO キッズ

後援：中野区、中野区教育委員会、東京都社会福祉協議会、東京都小学校 P. T. A 協議会、音楽教育振興財団、中野区立小学校 PTA 連合会、中野区立中学校 PTA 連合会、東京都子ども会連合会、中野区社会福祉協議会、JCN 中野

(1) 実施日時：2007年3月24日(土) 25日(日)

(2) 実施場所：なかの ZERO 西館美術ギャラリー1, 2(1F 175㎡、2F 105㎡)

(3) 対象者：中野区を中心としたアート NPO やアーティスト、及び一般区民

3/24 一般入場者 168 人、参加団体 40 人、当会関係者 95 人 計 303 人

3/25 一般入場者 83 名、参加団体 35 人、当会関係者 98 人 計 216 人

総計 519 人

<参加協力団体>

	団体名	情報	準備	ブ ス 店	一 出	ワ ク シ ョ ッ プ	パ フ ォ ン マ ン ス	備考
1	Art Dorce	●						
2	阿佐ヶ谷ジャズストリート	●		●				
3	あすとらいあ・すぴりっつ	●						
4	アフタフ・バーバン	●						
5	いせフィルム	●						
6	映像館	●						
7	エイブルアートジャパン	●						
8	NPO 支援センターすぎなみ	●						
9	演劇企画くすのき	●						
10	小田原女子短大	●	●	●	●			森のお弁当屋さん
11	オルタスジャパン	●						子ども放送局
12	(株) 音楽之友社	●						広報協力
13	CAP ユニット	●	●	●				
14	吉祥寺 MOMO プロジェクト	●	●	●				
15	グルッポ・ディ・ウィズ	●						広報協力
16	グローバルシアター和の輪	●						
17	劇団仲間	●	●	●				
18	劇団未来劇場	●						
19	子育て応援団ゼロプロジェクト	●		●				
20	子ども劇団わくわく	●	●	●			●	中野歴史クイズ
21	ざ・ほっぴい	●	●				●	人形劇
22	社会資源再生協議会	●	●	●				リユース食器
23	ジャンベパラドゥンカ	●	●				●	ジャンベ演奏
24	松栄楽器	●	●					ピアノレンタル
25	杉並フットボールクラブ	●	●	●				
26	Studio-neo	●						

27	TAM オフィス	●				●	演奏
28	地域学習協会	●	●	●	●	●	機材
29	TEIJIN	●	●				布地提供
30	伝承文化研究所	●	●	●	●		百人一首
31	東京えびす連	●					
32	東京演劇集団 風	●	●	●			
33	東京環境構造センター	●	●				
34	東京工芸大学映像学科有志	●	●				設営
35	東京書籍印刷（株）	●					印刷協力
36	東京土建組合中野支部	●	●				設営
37	どんきい劇場	●	●	●	●	●	パペットシアター
38	中野元気力発信所	●					
39	中野すまいの相談室	●	●				
40	中野ハナミズキの会	●	●	●			
41	西荻まちメディア	●					
42	日本オーケストラ連盟	●					
43	ぱらぱらマンガ友の会	●	●	●	●		ぱらぱらマンガ
44	ぱりちゃんず	●	●	●	●	●	人形劇
45	パワー・キャット	●					
46	パントマイムクリエイションマリオ	●				●	パントマイム
47	プランニューダンスマーケット	●					
48	ほねぶとネット	●					
49	ma-navisioners	●	●	●	●	●	パフォーマンス
50	ミニ・ミュンヘン研究会	●					
51	(財)民間放送協会	●					
52	もみじやま絵画教室	●	●				壁画指導
53	森の学級	●	●	●			
54	ユージン・ミュージック・プランニング	●					
55	ヨイサの会	●				●	音のパフォーマンス
56	らふと	●					
57	LOTTE	●	●				お菓子提供
58	ZERO キッズ	●	●	●	●	●	キッズコースター、ミステリーマンション、クローゼットライブ

(4) 内容と方法

<事前準備>

- ・ ワークショップ
- ・ 企画会議（プロデューサー、ディレクター、運営委員の一部が参加する会議）
- ・ 子どもの参画を実現するためのワークショップ
- ・ 子ども会議（子どもたちの企画会議）
- ・ 運営委員会（運営委員による、イベントの運営に関わる会議）
- ・ 全体会（大人、子ども全員）

- ・ 交流会（参加団体を含めた会）
- ・ 設営作業
- ・ その他

日時	場所	内容
2006.7/25	ZERO キッズ事務所	企画会議（18年度公益活動助成金申請について）
8/31	ZERO キッズ事務所	企画会議（18年度公益活動助成金申請について）
8/2	ZERO キッズ事務所	企画会議（18年度公益活動助成金申請について）
8/14	ZERO キッズ事務所	企画会議（18年度公益活動助成金申請について）
8/16	中野区役所	企画会議（18年度公益活動助成金申請について）
8/18	中野区役所	公益活動助成金申請書類提出
8/29	ZERO キッズ事務所	企画会議（プレゼンテーションについて）
9/3	中野区役所	公益活動助成金プレゼンテーション
9/24	中野二中	全体会（企画についての説明）
10/4	ZERO キッズ事務所	企画会議（会場と開催期日の見直しについて）
10/18	ZERO キッズ事務所	企画会議（こどもワークショップ開催について）
10/27	ZERO キッズ事務所	企画会議（こどもワークショップ開催について）
11/10	ZERO キッズ事務所	企画会議（ワークショップの方法、役割分担等）
11/12	ZERO 学習室	子ども会議・ワークショップ「こども・まち・アートの力」1
11/17	ZERO キッズ事務所	企画会議（ワークショップのまとめ）
12/1	ZERO キッズ事務所	企画会議（ワークショップのまとめと次回について）
12/10	中野坂上	企画会議（イベントの内容、運営方法、参加団体について）
12/13	ZERO キッズ事務所	企画会議（次回のこどもワークショップについて）
12/23	ZERO ギャラリー	子ども会議・ワークショップ「こども・まち・アートの力」2
12/29	ZERO キッズ事務所	企画会議（ワークショップのまとめ）
2007.1/8	ZERO キッズ事務所	企画会議（今後のスケジュールについて）
1/9	ZERO キッズ事務所	企画会議（ワークショップについて）
1/17	ZERO キッズ事務所	企画会議（役割分担とスケジュール調整）
1/20	ZERO 学習室	運営委員会（実施にあたっての役割分担について）
1/21	桃丘小学校	全体会（事業企画説明）
1/28	ZERO 学習室	全体会（実施にあたっての役割分担について）
1/31	JCN 中野	企画会議（広報活動）シティテレビ出演
2/1	ロッテ本社	企画会議（参加団体と打ち合わせ）
2/4	桃丘小学校	子ども会議（ジェットコースターと迷路の実現に向けて）
2/5	サンプラザ	企画会議（参加団体と打ち合わせ）
2/6	ZERO ギャラリー	企画会議（フォーラム講師依頼について、保険について）
2/16	エイブルアート	企画会議（参加団体と打ち合わせ）
2/19	ZERO キッズ事務所	企画会議（リーフレット、ポスター検討）
2/21	なかのZERO	運営委員会（演劇ワークショップ、フォーラムについて）
2/23	ZERO キッズ事務所	企画会議（参加団体説明会について）
2/25	ZERO ギャラリー	子ども会議とワークショップ（森の壁画）、参加団体説明会
2/28	東京書籍印刷	リーフレット、ポスター入稿
3/4	ZERO ギャラリー	子ども会議とワークショップ（森の壁画） 運営委員会（キッズカフェ）

3/7	ZERO キッズ事務所	運営委員会（参加団体と打ち合わせ）
3/11	ZERO 学習室	子ども会議とワークショップ（森の壁画）全体会（設営準備、広報活動）
3/12	JCN 中野	企画会議（広報活動）シティテレビ出演
3/13	九州大学	フォーラム講師打ち合わせ（目黒氏）
3/16	ZERO ギャラリー	運営委員会（設営打ち合わせ）
3/18	ZERO 学習室	子ども会議とワークショップ（森の壁画）、全体会（設営準備）
3/19	ZERO ギャラリー	資材搬入、キッズカフェ（大人）・ミステリーマンション（子ども） 設営作業開始
3/20	ZERO ギャラリー	キッズカフェ・ミステリーマンション、森、木、設営作業
3/21	ZERO ギャラリー	参加団体 ブース設営、交流会
3/22	ZERO ギャラリー	設営作業
3/23	ZERO ギャラリー	設営作業、フォーラム講師打ち合わせ（柄田氏）
3/24	ZERO ギャラリー	<公開> ブース出展、ワークショップ、パフォーマンス
3/25	ZERO ギャラリー	<公開> ブース、演劇ワークショップ、フォーラム、片づけ
3/26	ZERO ギャラリー	ゴミ搬出、清掃、CTN 放送
3/29	ZERO キッズ事務所	運営委員会（報告書のまとめと今後の展開について）
4/13	区役所、吉祥寺	公益活動助成金報告書提出、運営委員会（反省会）
4/14	オリンピック記念青少年総合センター	子ども放送局「子ども特派員報告」放送
4/18	ZERO キッズ事務所	運営委員会（参加団体反省会について）
4/29	ZERO 学習室	参加団体 反省会と交流会～今後の活動に向けて

<当日の様子> →巻頭グラビア写真参照

3/24（土）

★ブース展示、キッズカフェ、キッズコースター

10:00～18:00

★パフォーマンス、ワークショップの実施

10:00～パントマイムライブ（パントマイムクリエイション・マリオ）

森のおべんとうやさん（小田原女子短大）

11:00～中野歴史クイズ（子ども劇団わくわく）

パペットワークショップ（どんきい劇場）

12:00～音のパフォーマンス（クニポン+きょうじゅ）

12:30～みんなでまなぶっちょ（ma-navisioners）

13:00～ぱらぱらマンガワークショップ（ぱらぱらマンガ友の会）

13:30～ペープサートで遊ぼう（ぱりちゃんず）

14:30～ブラックライトシアターほか（ざ・ほっぴい）

15:00～キッズタイム（ミステリーマンション、キッズ遊園地）

17:00～歌とギターとテルミンと（のぐちひろし+鳥音）

3/25（日）

★ブース展示、キッズカフェ、キッズコースター

10:00～13:00

★パフォーマンス、ワークショップの実施

9:30～12:00 演劇ワークショップ（講師：大多和勇）

10:00～ 袋で人形をつくろう！（ぱりちゃんず）

12:00～ キッズタイム（ミステリーマンション、キッズ遊園地）

12:45～ ジャンベ（アフリカの太鼓）演奏

13:00～ クレイアニメ上映会

★フォーラムの開催

14:00～16:30 「こども・まち・アート」 フォーラム （要約及び抄録後述）

コーディネーター：中埜博 （プロフィール等後述）

パネラー：大多和勇

：鳥越けい子

：目黒実

：柄田明美

16:30～17:00 クロージングライブ

歌：ZERO キッズと仲間たち

ピアノ：谷川賢作

テルミン：鳥音

（5）実施体制

プロデューサー：佐々木 香（特定非営利活動法人 ZERO キッズ理事長）

ディレクター：中埜 博（コミュニティデザイナー）

アシスタント・ディレクター：山口 敦（都市計画プランナー）

運営スタッフ：小山郁子、倉橋文子、能勢美香、斉藤ひろみ、長瀬涼子、亀岡文江、丸山紀子、川田冬紀、鈴木美佐子、倉田恵美、沼田澄子、嶋田恵美
ZERO キッズママ&パパの会

アドバイザー：斉藤睦（地域総合研究所）、三好良子（人材育成コンサルタント）

協力：大多和勇、谷川賢作、太田富夫、早川元啓、池田邦太郎、高橋悦子、長谷部暢子
中村功、野口博志、矢田美帆、渡部瑞穂

「こども・まち・アート」フォーラム の概要

参加者(発言順・敬称略)

- 中埜 博 (案内人、コミュニティ・プランナー)
- 大多和 勇 (演劇企画くすのき主宰)
- 鳥越けい子 (聖心女子大学教育学科教授)
- 目黒 実 (九州大学ユーザーサイエンス機構特任教授)
- 柄田 明美 (ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室研究員)



フォーラムの要旨

1) 各パネリストから、各自の専門分野を通じて「こども・まち・アート」のかかわりについて話していただいた。

● 大多和勇さんからは、10年間にわたる ZERO キッズでの演劇アドバイザーの経験、またこの日午前中に行われた演劇ワークショップの結果を踏まえ、こどもの表現活動の可能性と、演劇人としてのかかわりについて。

● 鳥越けい子さんからは、「アート」とは本来生活と密接に結びついたものであること、そして子育てのなかにアートを日常化する営みの価値が語られた。

● 目黒実さんからは、実際にチルドレンズ・ミュージアムを運営する立場から、こどもの力を信ずるべきであること、また地域の大人がどう向き合うか、ということについて。

● 柄田明美さんからは、中野区の文化芸術行政に携わる学識経験者としての立場から「中野らしい」文化とは？、それにずっと中野に住み続けるための課題についての指摘があった。

2) 次に、今回2日間だけ開催されたキッズ・ミュージアム（チルドレンズ・ミュージアム）を今後常設施設としていくことの可能性について討議が行われた。

- 子どもにとって「自分たちの基地」は必要であったし、今もそうであろう（大多和）
- なくなるものだからこそその素敵さもある。欲をいうなら常設と仮設のよさが両方あるといい（鳥越）
- 今回の営みを記憶として残したい。常設施設ができたとしてもそれに満足せず、地域へとアウトリーチすることもあっていい（目黒）
- 場を持つということは、ソフトウェアも持つ、という覚悟が必要（柄田）

3) 一方、会場からは NPO の運営に対する行政の支援施策の限界、ボランティアの担い手の負担が過重であることなどの問題提起がされ、それに対する討議も行われた。

- 収益事業を行って自助をめざす NPO もあるが現実にはむずかしい。行政と区民のミーティングの場で語っていくことが必要（柄田）
- 税制改革や行政と民間が協働して対話する場づくりが必要。またボランティアには、「かわりを楽しむ」心がなければ持続がむずかしい（目黒）
- 例えば学生が持つエネルギーを地域に活かすなど、新たなネットワークづくりが必要な時期にきているのではないか（鳥越）
- ボランティアのお母さんがたがどうやったら楽しく、楽に続けられるかをプロフェッショナルとして工夫し、考えたい（大多和）

4) フォーラムの中盤からは客席の参加者からも活発な発言がされ、行政従事者、こどものアート活動に係わる立場、親としての立場、それぞれからの意見や質疑が交わされた。

5) また、特にパネリストの目黒さんからは、実際にチルドレンズ・ミュージアムの企画運営に携わる立場から、「チルドレンズ・ミュージアムとは？」ということについてのさまざまな観点からの概念が解説された。

6) 最後に結びとして、コーディネーター（案内人）の中埜博さんより、「子どもたちの居場所づくりへ向けては、ネットワークづくりが必要であり、今日はそのための第一歩」とのコメントでしめくくられた。

※ 資料編の「子ども・まち・アート」フォーラム抄録をぜひご覧ください。

事業の成果

- ① 子ども、アートに関わる団体同士がお互いの活動を知る機会となり、つながりができた。

複数の団体に参加協力を呼びかけて事業を実施しました。各団体とも忙しい中、時間をやりくりして快く協力してくれました。今まで、名前だけは知っていても実際に活動内容を知らない団体同士が、準備過程から一般公開までの時間を共に過ごす中で、親しくなり理解し合うことができたのは非常に大きな収穫でした。

- ② 子どもたちが企画した夢の場所が、たくさんの大人の力も借りて実現した。

子どもたちは、11月にワークショップを行ってから、自分たちの夢の場所を実現するために準備を重ねました。事業を終えてからの感想には、「自分たちの考えたことがこんな風に変現できるとは予想していなくてびっくりした」という感想が多くありました。自分たちで役割を決めて分担をしたり、大人の仕事を手伝ったりと、積極的に考えて動く姿が見られました。準備期間の3/19(月)からは、子どもたちは学校が終わってから毎日来て夜になるまで作業に頑張りました。子どもの参画による夢の場所が、それを支え続ける大人たちによって保障され実現できたといえるでしょう。

会場設営には5日間を要しましたが、東京土建組合の専門家の協力や、東京工芸大学の学生ボランティアが大きな力になりました。会場内の大きな木に繁茂する木の葉の数は、たくさんの人たちの手と心を表していました。

布地やお菓子、印刷など企業から物品協賛を得ることが出来、少ない予算の中で大きな助けになりました。

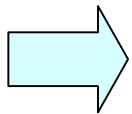
- ③ 子どもの参画による居場所の実現と、芸術文化によるネットワークづくりを、多くの区民にアピールし理解を得ることができた。

24日(土)25日(日)の一般公開の日には、予想以上の入場者があり(総計519人)、ワークショップやパフォーマンスに大いに満足し、楽しんでいる様子でした。入場者の滞留時間が長かったことは、満足度の証明と言えます。

今後の展開

前述された今回の報告から、以下の5つの課題を抽出しました。私たちは、今までの活動に合わせて活かしながら、ZERO キッズの実践活動を続けていきます。

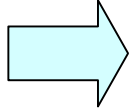
- (1) 子どもがつくる子どもの居場所
- (2) いつも溜まれて、寄れる場所
- (3) 「アート」は有効なコミュニケーションツール



学校を「遊ぶ・学ぶ・表現する チルドレンズミュージアム」へ

中野区内で、平成20年度以降の小中学校統合後の学校施設跡等を有効活用して「遊ぶ・学ぶ・表現する チルドレンズミュージアム」としての常設のキッズミュージアムを展開していきたい。実現までは、仮設であっても今まで通り、こどもたちが「アート」を媒介として「人」や「夢」と出会い交流し、心身共に健やかに成長できる場を作っていく。

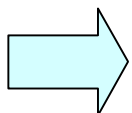
- (4) ネットワークの必要性



「こども・まち・アート」ネットワーク事業→いずれは、キッズユニオンへ

「アート」に関係するNPOや団体、個人を「こども」に対して何ができるのかという共通項からつないでいく。まずは、交流会や学習会を一緒に行いながら、今回のイベントにより集まった団体を中心にゆるやかなネットワークをつなぐ活動を続ける。。

- (5) キッズカフェの可能性



簡易版臨時キッズカフェオープン

常設のキッズカフェはすぐには難しいが、簡易版のキッズカフェを場所が変わってもできるようにする。5月の杉並区のNPO フェスタをはじめとして、積極的に外に向かって展開していく。より広い情報交換と交流の場として充実させる。

資料篇



資料1：子ども会議（ワークショップ）風景

■ 「こども・まち・アートのか」 2006.11.12

★自分たちが一番楽しいと思う夢のアイランドをグループで、目に見える形に描きました。



まず自分の夢の場所を頭の中に描き、それから絵にしました。みんなから出たアイデアをグループ毎に3つに絞り、3つの夢をそれぞれの島に貼って、相談しながらふくらませていきました。島の形や道も描いて、キッズアイランドが生まれました。

4年生までのグループ

5年生以上のグループ



大人のグループ



「こども企画会議」 2006.12.23

★自分たちの描いた夢を具現化していこう！



ダンボールで会場の模型をつくりました。どこに何をつくらうか？考えて、壁に絵を描いたり、写真を切り抜いて人の形をつかって立ててみました。紙に描いた夢を立体にしていきました。

こども・まち・アートのか

2006年11月12日（日）13:00～16:00

■ 目標

- *こどもたちが一番楽しいと思えることを目に見える形にする
- *大人もこどもも「わくわくする気持ち」を感じる
- *ここから自分たちでそれを実現する方法をみつけていくことにつなげる

■ 進行

12:30 受付開始

13:00 グループ毎に分かれて座る

13:05 あいさつと今日の説明、講師紹介（佐々木）

13:10 「似顔絵を描こう！」（アイスブレイキング）

- ・ペアになる
- ・似顔絵を描く（鼻→目→ ）
- ・ニックネームをつける
- ・紹介しながら壁に貼る

画用紙
（1枚／1人）
クレヨン
マーカー

13:35 「キッズアイランド列島をつくろう！」

- ・第1部 説明

14:00 「夢の島の三つの夢」（25分）

- （1）まず自分の夢を絵に描いてみよう！
- （2）

この島を「キッズアイランド」という王国にしたいのです。

まず、自分たちの一番の夢を描きこみたいのです。

- ・まず、目をつぶって、自分たちのほしい夢のアイランドを真っ暗な中で見てみましょう。必ず見えます。自分が一番楽しくて大好きなことをしている場所が見えるまでがんばってみましょう。
- ・どんな場所で、それは室内ですか？外ですか？森の中ですか？海の上ですか？
- ・誰と（お友達？ 先生？ お母さん？）
- ・どんなことをしているのでしょうか？
- ・さあ、見えたものを自由に描いてください。下手でもいいのです。でも誰かにそれをぜひ見せたいという気持ちで描いてください。

<用意するもの>

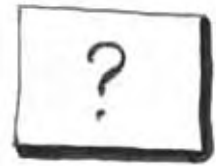
マイク
飲み物
お手ふき
模造紙
マーカー類
テープ類
のり
はさみ
カッター
色画用紙
ダンボール
デジカメ
シール



(3) さあ、描けた！

みんなで見てみよう！！

ダンボールの壁に貼って自分の夢を説明しよう！（30分）



その夢に名前をつけてください

(4) みんなのアイデアを3つにしぼろう！（15分）

全員で3つのドットを持って、自分のアイデアに近い

絵の部分にドットを貼ってみましょう！

みんなのドットの多いところを「3つの願い」にします。

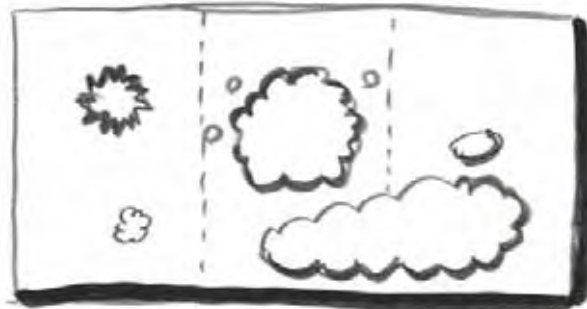


14:45 ・第2部

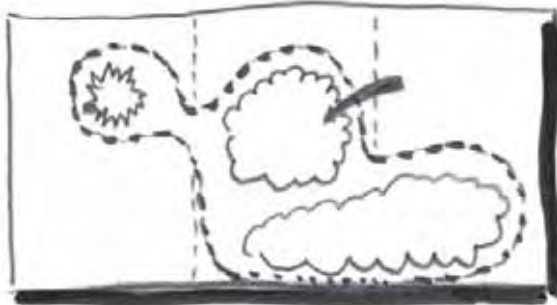
「自分たちの島に3つの夢を貼ろう！」(35分)

15:20 (1) 「3つの願い」をはさみで切って島の中に貼っていきましょう。

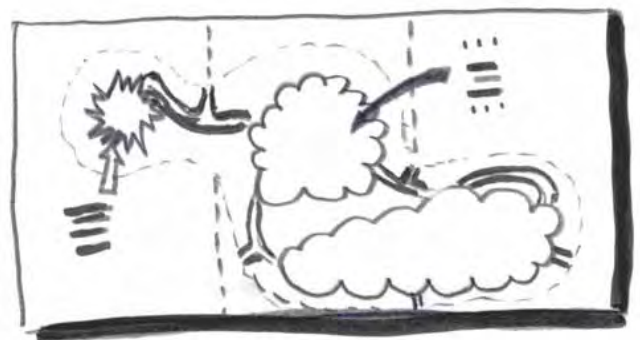
島の形は自由です。



(2) 次に島の形を描き込みましょう



(3) 道も描きましょう！



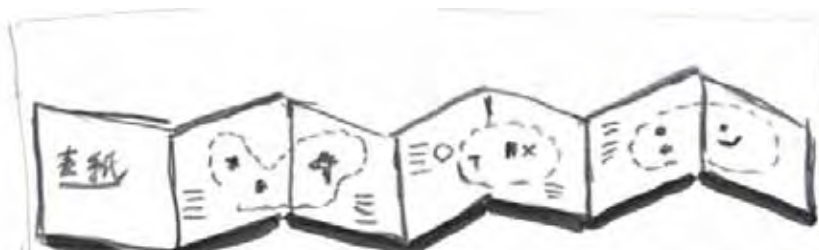
15:20 (4) 島を並べて発表!



15:50 (5) まとめ

この絵を使って、次のような「パノラマイディア案内」を作ります。

16:00



そして、このアイディアの一部を春休みの3月24日、25日に実現したいと思います。その時は各グループ毎にもう一度集まりを持ちますので、よろしく!!

←これが重要!
「夢の具体化方法を考える」

夢のキッズミュージアム

キッズ企画会議

2006年12月23日（土）13:00～16:00

■ 目標

- ・ 11/12のワークショップ「キッズアイランド列島」で、自分たちが出した夢を一部具体化していこう！
- ・ 「どうしたら私たちが考えた夢の島」の一部を、この会場（なかの ZERO 西館美術ギャラリー1, 2階）に実現できるか・・・
「パノラマ」をつくって考える。
- ・ これは、次回のワークショップ「原寸設計」企画の元になります。

■ 進行

13:00 前回のグループにわかれて座る

13:10～ ダンボールで舞台（かんたんな会場）づくり

14:00～

- 1) まず、内側に紙を貼って、背景を考える。
ラフに描きながら貼って行って、作りながら考える
- 2) 写真を切り抜いて、人の形をつくって立ててみる
- 3) 各グループで、自分たちの考えた夢を紙で作って立体にしていく
※注：人とくらべてほしいの大きさをみて決定！
部屋全体の入り口、階段、踊り場も一緒に考えましょう。

- 4) もとの「夢」をここにどうやって実現するか？が大切
 - ・ 全部実現しようと思わないでいいよ。一部でいいよ。
 - ・ 一番楽しそうな、一番おもしろそうな、自分がやってみたいこと

「こども・まち・アート」交流見本市

夢のキッズミュージアム

★いつやるの？

みんなでつくる期間	3月21日、22日、23日
お客さんにきてもらう日	3月24日（土）25日（日）
かたづける日	3月25日の夜と3月26日（月）

★どこでやるの？

なかの ZERO 西館美術ギャラリー1階と2階

★何をやるの？

大人もこどもも、みんなが自分たちで考えた企画を実現する
その企画をほかの人にも楽しんでもらえるものにする
みんなを楽しい気持ち、幸せな気持ちにする
こどもとアートのパワーで、みんなを元気にする



●ふしぎ森●1階ギャラリー

～みんなでつくるテーブル～

中国の田舎では、ひとりの客人のために、町じゅうの路上に長いテーブルを出しておもてなしをするそうです。

今回、段ボール製の「細長いテーブル」を全員で作ります。

この巨大テーブルは、ミュージアムに来てくれるお客さまをもてなすテーブルであり、参加者の「展示ブース」であり、

観客席でもあり、また舞台装置でもあります。

みんな床に座ってしまいましょう。だからテーブルは低くていい。

座る人の目線で、会場が見渡せるように。

壁を見渡せば、子どもたちが描いた「森」がみえるはずです。

2階から、たまに、シューターにのって、

仮面をつけた「まればと」がやってくるかもしれません。

～いつも未完成、でもそれでいい～

みんなで作るテーブルのまんなか大きな「木」があります。

吹き抜け全体をおおうような枝ぶりです。

枝からぶらさがるいろんな、本物の果実、お菓子、葉っぱ・・・

最初に、

木の幹をぐるっと囲むようにカウンターをつくります。これだけはオトナの仕事。

みんな、必ずこのカウンターにつながるように

テーブルを継ぎ足し継ぎ足し作っていきましょう。木が枝をのばすように、

参加するグループは、

まず自分の座る場所を決めてから、段ボールを切ってテーブルをつくります。

作ることに参加できないひとのスペースは、子どもたちがテーブルを作ってしまう。

このテーブルのうち大人の座るところは、

自分たちの宣伝物の展示ブースとしてつかうことができます。

小さな区切り壁をたててもかまいません。

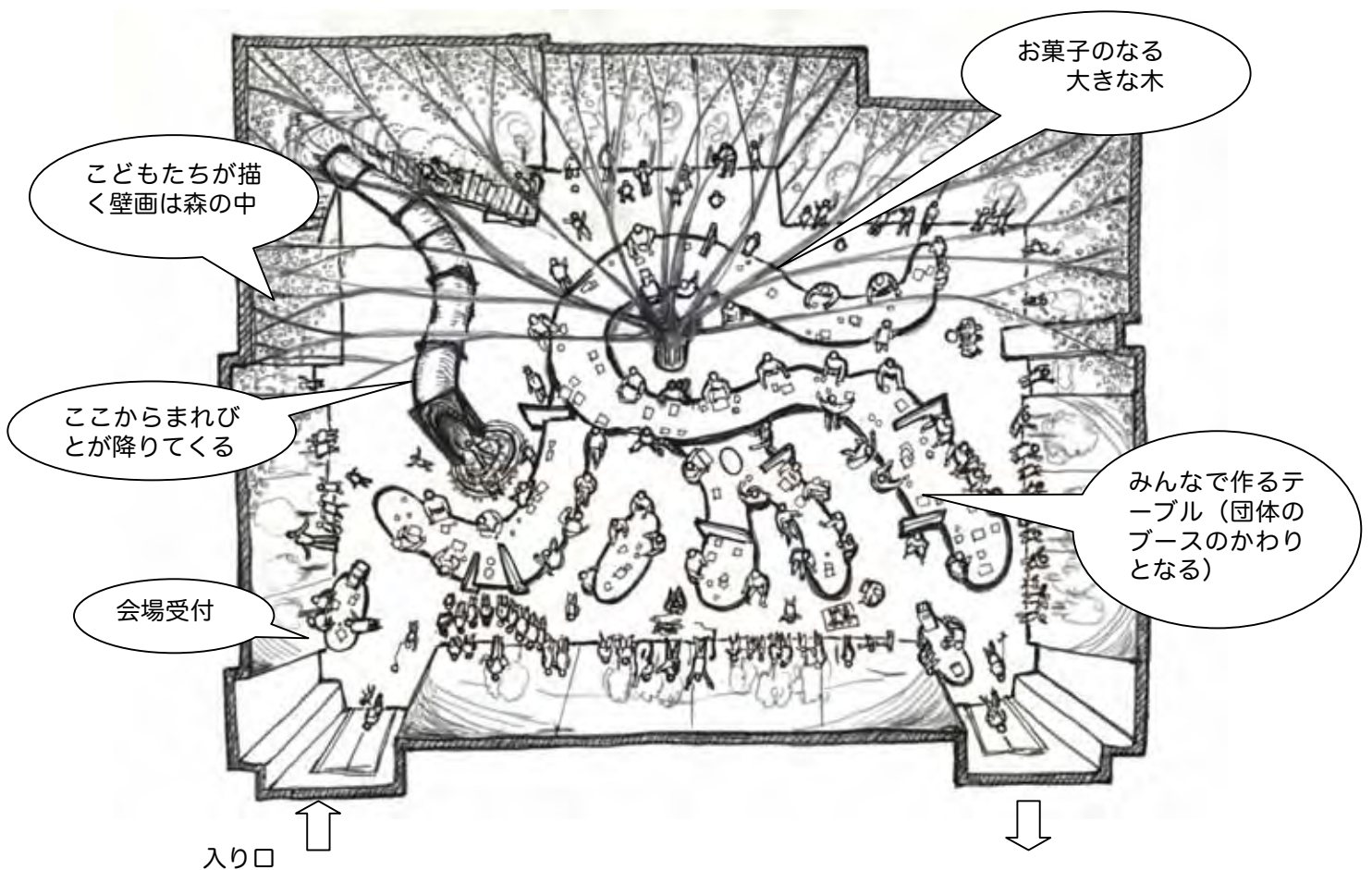
作る途中でた切りはしは、みんな捨てないで床に落ちている。それでかまいません。
来たひとは、誰でも、テーブルの一部を作って帰る。何か描いてもかまいません。
つくる道具と材料は、端に置いてあります。
いつも「工事中」。それでかまいません。

～子どもの領土～

夕方になると、舞台照明が灯されます。

この会場は、「子供の領土」のひとつのかたちとして、記録に残されます。

枝にぶらさがったお菓子、プレゼントは、最終日にみんなのおみやげとなります。



1階 ふしぎ森

●ブース

それぞれがダンボールで作ったテーブル

●壁面

3面は森の絵 (こどもが製作)

1面は森の掲示板 (各団体の紹介パネル、ポスター等)

●大きな木

●パフォーマンス、ライブ

●雲の上のキッズ・カフェ● 中2階

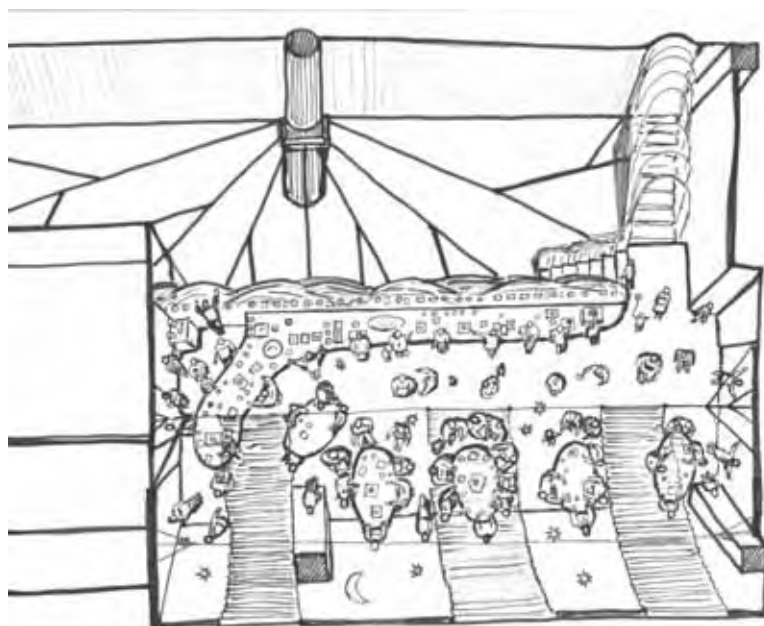
11月の「こども・まち・アートのカ」ワークショップでは、子どもとオトナ、それぞれが、「私の大好きな場所」「行きたい場所」「あったらいいな、こんな場所」を思い浮かべ、絵に描き、夢を語り合いました。

お母さんたちは子育てに少し疲れているようです。
オトナだけでゆ〜っくりできる場所がほしい。
でもやはり、子どもたちの安全を見届けられる場所がいい。

そんなイメージも実現したいので、このカフェを作ります。
いろいろなNPOのひとたちの活動記録が窓に映るようにします。
ここにブースを出してもかまいません。

中2階 雲の上の キッズカフェ

- 休憩スペース
- 時にはパフォーマンスも行う
- 一部写真展示
- コスプレ写真館



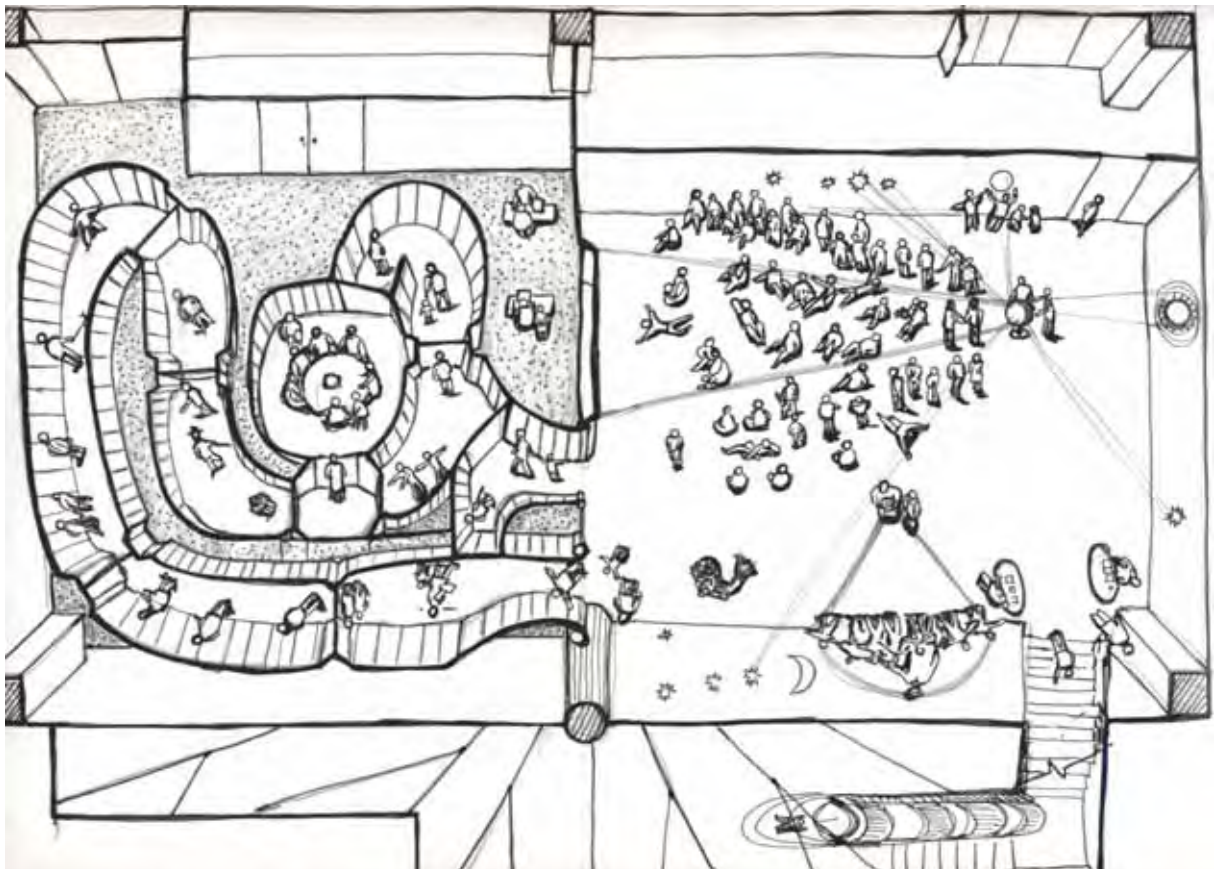
●まれびとの里（異次元空間）● 2階ギャラリー

2階は、未知なる空間です。普通の部屋で、普通の人間が、何か、訴えたり、映像を使って発表をしたり、しているようですが、部屋いっぱいに星空が写っていたりもします。なんとも、不思議なへやです。壁の絵は、よる、ひる、あさの空の絵のようです。

何にもない部屋のようなのですが、よく見ますと、怪しげな入り口と出口があって、まるで、むかしはやった、芝居小屋のような、お化け屋敷のような雰囲気の変なところがあります。

入ってみると、段ボールで作った迷路という感じです。通りの途中に何度か、隠し扉があって、

だんだん怪しい場所へ、導かれてしまいます。なんと、ここは、本当は、まれびとたちの、住処らしいのです。表向きは、迷路やお化け屋敷のような形ですが、じつは、それはまやかしいのです。たまに、まれびとのてが伸びてきたり、部屋のすみに、じっとうずくまっていたり、長い髪で、人間の顔を食べるへんな生き物もいますが、こわがらせて、まれびとの住処に、人間があまり近づきすぎないようにしているだけです。でも、皆さん、ここでの体験は誰にもしゃべってはいけません。しゃべったりすると、あなたのこれからの人生に恐ろしいことが、起こる可能性があります。そして、しゃべらないと誓わないと、永遠にこの迷路から出られません。一つだけ、いいお話をします。この迷路の形をした、まれびとの住処を訪れると入り口で不思議な手形をもらえます。それはまれびとたちからの秘密のプレゼントですから、それも秘密にして、おかなければなりません。



●青空の階段●

虹をわたり、雲をこえてそらへとつづく階段。
ここはまたあるときは「舞台」にもなります。

2階 異次元空間

- 迷路のお化け屋敷
- 空の遊園地
- プロジェクターを使っての上映会
- パフォーマンススペース

参加協力団体、個人の皆様へ

- * ブース設営 できるだけ、自分のテーブルの設営（3/21）に一緒に関わってください。
（全期間でなくても可、3/22,23 も可能です）
→一緒につくる作業をすることから、つながりましょう！
3/21 は、作業終了後の 6 時～交流会を予定しています。
- * 展示物 パネル展示、団体のリーフレットを置く、著作物を販売など
- * 実演、パフォーマンス 企画会議で時間と場所の調整をします。
- * 参加資格 特にありません。芸術文化団体に限りません。こどもたちの未来を少しでもよくしたいと思う気持ちがあるならば、どなたでも歓迎いたします。
- * 費用 ブース設営の基本的な材料費は当会で負担します。持ち込み資料などは各自で準備してください。販売や展示は自由です。
- * 謝金 ブース、展示、実演者への当会からの謝金は原則としてありません。
- * 説明会 2/25（日）午後 3 時～4 時 なかの ZERO 西館美術ギャラリー 1
- * その他 協力団体名は、イベント広報用のリーフレットに記載します。

参加申込書（2/ までに、F A X、メール、郵送でお願いします）

団体名（個人名）	
ブース	希望する ・ 希望しない
設営（テーブルづくり）	参加できる（ 日 時～ 時）・ 参加できない
販売	する（何を？ ）・しない
パフォーマンス	する（何を？ ）・しない
	具体的に時間や場所などの希望があれば書いてください。
説明会	参加する ・ 参加できない
連絡先	〒 住所 電話番号 F A X Eメール 担当者：

		美術ギャラリー1階	美術ギャラリー2階
3月18日(日)	午後:キッズ会場装飾用の木をつくる準備		
3月19日(月)	午前:布搬入 午後:ダンボール搬入		午後:迷路作業開始
3月20日(火)		大きな木 壁面 設営	迷路
3月21日(水・祝)	午前:準備 午後1時~ 作業説明 ブース設営 午後6時~ 交流会	ブース設営 壁面	迷路
3月22日(木)		設営作業	設営作業
3月23日(金)		設営作業	設営作業
3月24日(土)	ブース展示、ワークショップ、パフォーマンス	一般入場	一般入場
3月25日(日)	9時半~ 演劇ワークショップ 午前中: ブース展示 午後2時~ フォーラム 午後5時~ 片づけ	一般入場	一般入場
3月26日(月)	午後1時~ ゴミ搬出、清掃		

資料等搬入可能

＜参加団体の皆様へ＞

- * ブース設営(ダンボールで自分たちの場所をつくる)は3/21(木)の午後1時から開始します。22日、23日の作業も可能です。期間中は夜間も作業していると思います。
 - * パネル等の展示を行うために美術ギャラリー1階の壁面の1面を用意していますが、参加団体の皆様の持ち込む量が当日にならないとはっきりわからないので、早い者勝ちになりますのであらかじめご了承ください。(21日の1時に来てください)
 - * 設営ブースの場所も、21日の調整です。
 - * 設営作業に来られない団体で、情報コーナーに資料を置くのみの場合は、3/19~3/23の間に会場(なかのZERO)に届くように送ってください。
- 〒164-0001 中野区中野2-9-7 もみじ山文化センターなかのZERO西館美術ギャラリー気付
ZEROキッズ 佐々木 宛て 電話03-4412-8934(佐々木携帯)
03-5340-5000(なかのZERO代表)

★行き違いがあるといけませんので、送る場合はご一報ください。

- * 25日(日)午後のフォーラムは、豪華メンバーです。絶対に面白いと思いますので、ぜひご参加ください。

<お客さんの感想>

- ・ 大正時代から続いたといわれるもの、それに最新の楽器などもコラボレートして面白く楽しく思いました。発想を豊かにしていくように毎日の暮らしを心がけて、一人一人が素晴らしい未来を一つずつ残していきたいと思います。そうすれば楽しい老後があるのかな？楽しみ！（70代・女）
- ・ 想像した以上の内容で、次回もし行つたら、もう少し私たちのブースの準備をしっかり行いたいと思います。（50代・男）
- ・ 思ったより楽しくて吃驚でした。ちょっとゴタゴタした雰囲気でも落ち着かなかったのが玉にキズ？ですかね～（10代・女）
- ・ 開場前で呼び込まれて入りました。自由なスペースでびっくりしました。もっと広いと思います。（男）
- ・ 当日通りかかって入りました。キッズコースターは、子ども（小2）が気に入って何度も滑っていました。会場中央の大きな木がとてもステキでした。作り物なのに、本当の大きな木の下にいるみたいに、気持ちがゆったりしました。（40代）
- ・ ワークショップがどれも楽しそうでした。（30代・女）
- ・ 飾り付けから何から何までたのしかった。お菓子おいしかった。（30代・女）
- ・ キッズコースターがいがいなスピードでびっくりした。（10代・女）
- ・ キッズコースターがはやくて楽しかった。パラパラまんが、お弁当づくりが楽しくて、おみやげができた。（10代・女）
- ・ 子どもたちがここまでのものを作り上げたのには驚きです。飾り付けの工夫が素晴らしかった。会場に来ると大人も子どもも新しいクリエイティブなことを実感できると思いました。これからもさまざまな活躍を期待しています。（20代・女）
- ・ すべり台、パラパラまんが、かみしばいがたのしかった。（10歳以下・女）
- ・ すべり台、おばけやしき、みんながのびのびと活動して楽しそうでした。（30代・女）
- ・ 今日は楽しい空間をありがとうございました。5歳の娘と来ました。壁も天井も至る所に工夫が凝らされていてワクワクしました。大きな木と沢山の葉っぱたちには心が和みました。頭上に吊された彩り鮮やかなお菓子の箱たちには、大人の私でもついつい心がくすぐられました。運動会のパン食い競争とは違うワクワク感です。昔、子どもテレビ番組ピンポンパンで「最後は元気におもちゃへ行こう！」と大木の中に入っていくエンディング、なんだかそれを思い出しました。ZERO キッズバージョン「最後は元気にお菓子へ行こう！」
- ・ 歌の Make A Wish はいつ聴いても涙がでます。ステキな時間をありがとう！

<子どもたちの感想>

- ・ ジェットコースターはスリルがあつておもしろかったです。おばけやしきはいろいろなものがでてきておもしろかったです。なので今度いつかまたやりたいです。かたづけるのは

けっこうめんどうでしたが。(小5・男)

- ・学校の後に準備に来るのが楽しみだった。当日は「キッズマネー」の交換所をやってお金を数えるのが楽しかった。みんなの髪をセットするのがとてもたいへんだったけど、すごくうまくできた。(小5・女)
- ・いろんなものをつくるのが楽しかったです。キッズカフェのお菓子がおいしかったです。クッキーがとくにおいしかったです。キッズコースターはさいしょはすべり台だったけど、本番のときのつたらほんものみたいでした。(小3・女)
- ・ゼロでいっぱい友だちができた。学年がちがってもやさしくしてくれたり、先生たちもやさしくてうれしかった。ミステリーマンションがこわかった。新聞がなげてきてびっくりした。キッズコースターが速くて楽しかった。ボーリングの係で大人から幼児までいろいろな人が来てくれてうれしかったです。パラパラまんが体操を見ていて楽しかった。終わってからパラパラまんが体操をやってみたけど楽しかった。(4年)
- ・たのしかったけどちょっとつかれた。ジェットコースターがおもしろかったからまたやりたいと思った。またこういうイベントをやりたいです。(小2・女)
- ・もっと準備に参加したかった。葉っぱとかいっぱいあって、何も無い部屋があんなふうになるなんて、やればできるんだなあと思った。
- ・最初はあんな大きいものが出来るとは思わなかった。でも少しずつ進めていって、物になってって、こわすのが少しいやだった。キッズミュージアムをやるときは、小さい子と一緒にすべり台を滑ったり、お化け屋敷に入ったりして、高学年だというのに超楽しんだ。私はキッズコースターの担当でした。乗り物を作ったり、壁に色を塗ったり、トンネルを作ったり、自分の持っているアイデアを実現することができて、作っている時も楽しむことができた。キッズカフェではゆっくりしながら色々なショーを見て面白かったし、落ち着くことができた。またすべり台などは、大工さんが作ってくれて、自分たちの力だけではできないことも実感しました。みんなで一つのことをつくりあげるのはとても良いことだと思いました。またやりたいです。(中2・女)
- ・いっぱいともだちができた。キッズコースターがいちばん楽しかった。どこが楽しかったかというところ速いところです。ミステリーマンションはこわかった。パラパラまんがづくりはとても楽しかった。パラパラまんが体操をはじめでみていて、終わってからやってみたらとても楽しかった。(小3)
- ・楽しかったがつかれた。次回はもうちょっとシンプルなのがいいなと思う。最後の方はゴチャゴチャしちゃったのでそこが残念。キッズカフェはまたやりたい。(中1・女)
- ・おばけやしきに4回入ったら4回とも殴られた。ジェットコースターを作るのも遊ぶのも片づけるのも楽しかった。人もけっこう来てくれてはんじょーした。くにぼんと大多和さん(大人)がすべったときが一番面白かったです。あと、キッズカフェのポップコーンもおいしかったけど、量が少なかったです。本番(2日目)のゴスペルの歌もいい歌だし、

詩もいいな～と思いました。今度は合宿でもやってみたいと思います。(中2・男)

- ・ 設計図を見て、こんなのが本当に出来るのか？と思いました。みんなが準備しているのを見て、本当にやるんだ！と思いました。迷路もすごかったし、ジェットコースターを作っているのを見て「ただのすべり台じゃん」と思ったけど、滑ってみたらすごいこわくて、ジェットコースターの一部を滑ってるみたいなの感じでした。1階の木もすごく良く出来ていて、何か想像とほとんど同じですごく良かった。カフェも人気があったし、お菓子もすごくおいしかったから、すごいと思った。当日小さい子も大きい人もみんな楽しんでいて、キッズミュージアム成功かな？と思いました。パペット人形づくりが人気で私も作った。お化け迷路も人気で、頑張ってたかたっと思いました。またああいうものをやりたいです。つくってみたいです。(中1・女)
- ・ ジェットコースターを作る時に階段にすき間ができたからドアを作ったのが楽しかったけど、こわす時、このドアを残しておきたかったです。(小3・男)
- ・ キッズコースターが楽しかったです。速くてスリルがあって楽しかったです。また作ってやりたいです。(小2・男)
- ・ ジェットコースターと人形づくりが楽しかったです。おばけやしきとポップコーンが楽しくておいしかったです。(小1・女)
- ・ ジェットコースターとおばけやしきとポップコーンが楽しくておいしかった。(小1・女)
- ・ いろいろな団体があつまっていたので、いろいろな人と交流ができました。さまざまな考えを持った人がいました。さまざまな活動をしている人がいました。そのさまざまな考えや活動を知ることができてとてもいい機会になりました。またこのようなさまざまな団体と交流できるような場所ができるといいなと思いました。
- ・ おばけ屋敷に思ったよりお客さんが来てくれて、とてもうれしかったです。でも大変だったです。二日目はかぜで熱が出て出られなかったのも、またこういうものもやってみたいです。あんなにがんばって作ったのに二日でこわしちゃうのはとても残念でした。(小6・女)
- ・ お化け屋敷に思ったよりお客さんが来てくれて大変だったけど楽しかった。キッズコースターはスピードがあってちょっとびっくりしました。またこういうイベントをやりたいです。(小6・女)
- ・ わたしがのったことのないのりものやものがあったからたのしかったです。またおばけやしきや人ぎょうをつくったりしたいです。(小1・女)
- ・ キッズミュージアムには自分たちでつくったお店のほかにもいろいろなお店があってとてもたのしかったです。ほかにもえんそうや絵があってとってもにぎやかでした。またやりたいです。(小3・女)
- ・ 初めてこういうイベントをやって準備にも時間がかかったけどいろいろなことができたので楽しかったです。また機会があったらやりたいなあと思いました。お化け屋敷もよくで

きたと思います。みんな楽しんでくれたのでよかったです。(小5・女)

- ・ キッズミュージアムのおかげでやさしい友だちができた。指人形作りがかんたんだったので、家でも作りたい。色々な演奏やショーなどがあって楽しかったけど、人がたくさんで、よくおされていたかった。

<従事した大人の感想>

- ・ 美術ギャラリーの変身ぶりに感動！！初めはイメージがわからなかったけれど、一日であれだけ変わるなんて不思議。最後に壊す時は残念だったけど、ガラーンとしたギャラリーが妙に変な気がしたのもまた不思議でした。(30代・女)
- ・ ジェットコースターやお化け屋敷を中学生が懸命に作っている姿をみて、いいなーと思いました。(30代・女)
- ・ ダンボールのテーブル？カウンター？大きな木？どんなになるんだろう、出来るのかな？と思っていました。疑問ばかりで行った準備、初めは葉をつけても洗濯物が吊る下がっているようにしか見えなかった。毎日のように準備に通ううち、どんどん木らしく、カフェらしく、コースターらしく変化していくのを見ていて、学生の頃の学芸会のような気分になり、子どもにせがまれるまま長い時間をギャラリーで過ごしとても楽しかったです。出来上がったギャラリーを見て大感激。林の中にあるような気分になり、開催中から壊すのがもったいないと思っていました。カフェもあんなに沢山あったお菓子が全部なくなり、沢山用意してよかったですなと思いました。反省点はもっと人を誘えばよかったですなと思っています。もっといろいろな方に見て参加してもらえて共感してもらえたら・・・子どもも私も楽しい一週間で過ごせてよかったです。(30代・女)
- ・ 小学校高学年にとっては、自分がワークショップに参加する楽しさよりも、自分たちで作る楽しさ、その過程、お化け屋敷をすっかりまかされて仲間とそれを作っていく楽しさがかげがえのない体験だったようです。準備期間の一週間、学校が終わってから毎日ゼロホールに通い、キッズの仲間に毎日会えるのが嬉しくてたまらず、そばで見ている面白いくらい夢中になっていました。(40代・女)
- ・ お母さん（お父さん）の頑張りぶりに脱帽です。今後はそれプラス卒業生が担っていけるといいと思います。機会と場所と気持ちがあれば、OB, OGの若者たちが集う居場所にもなるのだらうと思いました。そして子どもの居場所づくりが大人の居場所づくりでもあることを改めて感じました。(40代・男)
- ・ フォーラムでは、こどもたちを取り巻く大人たちの意識について考えさせられました。地域というものがもっともっと密接になることで、子どもたちも自分たちの未来に希望が持てるようになるのではと思いました。(30代・女)
- ・ 他のNPOの人たちとふれあうことが出来て、色々学ばせてもらった。(40代・女)

◆案内人：中埜 博（なかの・ひろし）

コミュニティ・プランナー。パタン・ランゲージ手法による公共建築やまちづくり、「参加のデザイン」に取り組む。法政大学講師・中小企業大学校講師。ZERO キッズでは「こども・まち・アートの力」ワークショップのファシリテーターを務めた。

◇大多和 勇（おおたわ・いさむ）

演劇企画くすのき主宰。全国各地で子どもから高齢者までの演劇・表現活動の指導、芸術・文化行政の委員等をつとめる。現在、都立杉並総合高校・山梨県立大学講師。97年よりZERO キッズの演劇アドバイザー。地域文化、社会教育にプロフェッショナルとしてこだわりつづける演出家。

◇柄田明美（つかだ・あけみ）

明治学院大学経済学部卒業。住信基礎研究所入所等を経て、現在ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室研究員。芸術文化、まちづくり、NPOに関する調査研究を担当している。2005年には中野区文化芸術振興に関する懇談会で委員を務め、提言を行った。共立女子大学非常勤講師。

◇鳥越けい子（とりごえ・けいこ）

サウンドスケープ研究家。東京藝術大学音楽学卒業。「音の風景」を切り口に地域の文化に五感で触れることを提唱。また大学では「都市とアート」のゼミで教鞭をとり、学生とともに広尾商店街のまちづくりにも参画。幼少から暮らす杉並・善福寺ではコミュニティ FM「ラジオぱちぱち」に参加。聖心女子大学教育学科教授。

◇目黒 実（めぐろ・みのる）

九州大学特任教授・篠山チルドレンズミュージアム副館長

東京生まれ。日本初のチルドレンズ・ミュージアムを1994年、福島県霊山町でプロデュース。その後、兵庫県篠山市で廃校になった中学校を、沖縄市では、老朽化した「こどもの国・動物園」をチルドレンズ・ミュージアム、チルドレンズ・センター、動物保護センターとして再生する。篠山チルドレンズミュージアムは、河合隼雄氏とともに副館長として運営にあたっている。

現在、九州大学ユーザーサイエンス機構の特任教授・学術研究員として、子どもプロジェクトを主宰。2004年から九州、福岡だけでなく、北京や台湾など、国内外にて、日本の子どもたちが地球・環境問題に世界で一番詳しくなって欲しいというミッションを携えて108個の地球儀による「インゴ・ギンター展」を開催するとともに、今年度のグッドデザイン賞を受賞した「旅する絵本カーニバル」も全国各地でプロデュースしている。本年3月からは、念願の「いのちの宮沢賢治展」を企画・開催するとともに、九州大学にて「賢治授業」も開始する予定。また、新しい子ども未来学の構築、子どもの居場所づくり、子ども向けコンテンツ、子どもとともにデザイン、子どもに関わる人たちの学びの場-チャイルド・ライフ専門職大学院の設立活動なども行っている。

「子ども・まち・アート」フォーラム

〔参加者・発言順・敬称略〕

- 中埜 博（案内人、コミュニティ・プランナー）
- 太多和 勇（演劇企画くすのき主宰）
- 鳥越けい子（聖心女子大学教育学科教授）
- 目黒 実（九州大学ユーザーサイエンス機構特任教授）
- 柄田 明美（ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室研究員）

とても不思議な会場ができました。私たちの想像以上のものができたんです。でもこの作業は終わってはいません。もっともっと、ずっとつくり続けたいのです。こういう空間がいつも子どもたちのそばにあるようにするには、どうしたらいいのでしょうか？（中埜）

ディスカッションの最初に、まず4人のパネリストがそれぞれ係わってきたご自分の専門分野の経験から、「子ども・まち・アート」について語った。

1

最初に、ZERO キッズの演劇アドバイザーとして10年越しのお付き合いとなる演劇人・太多和勇さんからは、この日午前中に会場で行われた演劇ワークショップ「不思議ってどういうこと？」の報告を通じて、子どもの表現力の可能性、それに大人として、プロフェッショナルとしての係わりかたについてお話頂いた。

「不思議」を子どもたちが演じてみました。自分がつくった楽しいもの、伝えたいものを人にきちんと届けないと自分の自己満足に終わる。僕は、そこを発見してもらうことが大人の専門家の仕事なんだと思っています。（太多和）

太多和 今朝ここへ来て、不思議な空間、という子どもたちのイメージが形になっている、すごいなと思いました。そこでワークショップでは、「不思議ってなに？」という問いかけをし、子どもたちと話し合いをすることからはじめました。子どもたちに聞くと、いろいろの答えが返ってくる。その自分が考える「不思議さ」を声と体を使って表現してみよう、というわけです。普通じゃない歩き方、しゃべり方をしてみようと。そして不思議な島の朝から夜までをグループでつくってみました。自分の声と体と使って。そして発表し合ったんです。

自分で喜ぶということと、自分の喜怒哀楽を他人に伝えるということは、同じようだけれども違うことですね。表現というのは自分の身体と声でつくるのですが、自分が面白いと思ってもそれが相

手に伝わらないときには、それは表現にはなっていないということです。僕は、そこを発見してもらうことが大人の専門家の仕事なんだと思っています。

最初に行動すること、ゼロから1をつくるのが一番むずかしい。そういう勇気がある人を笑ってはいけません。

僕は ZERO キッズでいつも言うんですけど、ゼロから1をつくるのが一番難しい。1ができればそれに付け加えていけばいいけど、何もないところから1をつくるのはすごいことなんだよ。それに自信を持ちなさい、と。お客さんが見て「なんのこっちゃい」というものもできる。それ、こうするともっと面白いよと、外から言える。でも、何もないところから何かを最初につくるということはすごい勇気と決断が必要なんです。僕は子どもたちに「最初にやった子のことを笑っちゃだめだよ。そうすると次からみんなしたくなくなっちゃうよ」という。グループワークで何かを出来るのは、最初の子のおかげなんです。

子どもたちが育てる芽が花を咲かせる。それまでじっと見て、きちんと待ってあげられたらいい。

ZERO キッズの公演は最低でも2年かかる。1年目は子どもたちの遊びのなかから言葉や仕草をくみとってお母さんたちが台本をつくるわけです。もう1年でそれをプロの作曲の先生、ダンスの演技指導の先生に頼んで、きちんと伝達できる形にする。この2年間は長すぎると考えるのか、大人がゆっくりと待ってあげることが必要なんだと考えるのか。

ZERO キッズの今日の小さな芽が2年後に大きな芽に育って、子どもたちが「不思議ってなんだろう」って追求して行ってほしいし、子どもに関わっているお父さん、お母さんがそういう芽がどんな花を咲かせるか一生懸命見て、きちんと待っていただけるとありがたいと思います。

2

そもそも「子ども」「まち」「アート」とは、いったいどんな関係、意味があるのか？

「音の風景」という切り口から生活とアートの関係を研究するサウンドスケープ研究家・鳥越けい子さんには、「アート」の根源的意味、そしてアートがまちにあることの意味について語っていただいた。

アートとは「生きるための技術」。本来、生活とともにあるものなんです。私たち人間は、周りの世界とか社会とか環境と響きあいながらでないと生きていけないものだと思うんですよ。(鳥越)

鳥越 アートは、イメージしたことを音や形で表現することです。これは英語ですが、もともと「ア
ルス」というラテン語があってそれは、古代ギリシャ語の「テクネー」という言葉の翻訳だったので
す。テクネーは「技術」という意味で、では、アートとはなんの技術かということ、私たち人間が「生
き延びていくための技術」なのです。お金にゆとりがある人が楽しむ芸術ではない。人間は、世界や
環境と響きあいながらでなくては生きてはいけないもので、その響きあう形には声とか動きとか絵と
かいろいろある。そういう「生きる術（すべ）」がアートの本質だと思うんです。

では、アートが生きるための技術であるならば、「まち」というのはなにか。今日、この会合の前に
アフリカの太鼓の演奏がありました。リズムひとつをとっても、いかにもそこから太古の響きが伝
わってくるし、フラミンゴの踊りを見てもそこにはフラミンゴの動きをよく観察した動作が入ってい
る。そういうことはアートとか言い出す前に、お祭りとか踊りなどで私たちはみんなやっていたん
ですよ。ところが近代になってしまうとそういう営みと日常とが切り離されてしまうのですよ。

本来はアートは生きる技術で、生活そのものだったのに、現代の都市ではアートと生活
が切り離されてしまった。私たちは「それがなくては生きていけないもの」として、アー
トをもう一度生活の中に取り込むように、変えていかないといけないんじゃないかと思っ
ています。だからZEROキッズのお母さんたちが自分の子育ての中で、アートを日常化
しているというのは素晴らしいことだと私は思っています。

3

目黒実さんは、欧米で発祥した「チルドレンズ・ミュージアム」を日本でも実現し
ようと、全国各地で企画、建設、運営してきたパイオニア。目黒さんからはその実
体験のなかから、こどもの力、それと向き合う大人のありかたについてうかがった。

ナンセンス、ファンタジー、ユーモア、そして未経験の強さ、「なりきる力」。こ
うしたこどもたちの力を信じなくてはいけないし、こどもたちと一緒にやってい
かなければいけない。ただし一緒にではなく、単に「こどもたちのために…」と
か大人たちがいう時は、ちょっと危険な匂いがするから、気をつけてね。(目黒)

僕は大学に居ますから、大学がこどもたちになにができるかを考えています。学校と家
庭と大学。そして美術館とか図書館、博物館といった文化施設が、単にこどもたちが観客、
入場者としてくるのではなくて、美術や博物といったコンテンツを利用しながら、こども
たちにもっとメッセージを伝えるものとして活動することがとても大事だと思います。

ひとりでいる自由、共同する自由、その両方とも保証できること

なに事も一人でやることも大事だけれど、二人以上で共同してやることもとても大事で、その両方を保証することが大事なんです。僕たちでも一人でいたいことはたくさんあるでしょ。家庭でも家族の団欒と離れてひとりでしょんぼりしていることはいいことなんですよ。その一人でいることをきちんと保障してあげることと、参加をして共同することの二つがなければいけない。そのために、学校と家庭と大学と文化施設、そして、もうひとつ大事なものは地域ですね。地域が子どもたちに対してなにができるか、ということがあると思います。

学校の先生でもない、親でもない。他人でもない。「おじさん、おばさん」的な立場の大人がいることが地域社会の特性かな。

おじさん、おばさんというのは、年に2回クリスマスと誕生日に、素敵なデザインのものをあげたり、素敵な話をしてあげる。血がつながっているかつながっていないかわからないけれども、おじさん、おばさんのような立場で子どもたちにサジェスチョンしてあげる。そういうものが地域社会の特性かなと考えています。

4

柄田明美さんは、民間シンクタンクの研究者として、中野区の芸術文化行政のあり方に深くかかわってこられた。柄田さんからは「中野らしい文化とは？」というお話、それに中野が持つまちづくりの課題について伺った。

若い層の活動が活発なのが中野の特徴でもり、同時に若い層が子どもを育てて住み続けたいくなるようなまちづくりが課題でもあります。今はばらばらにあるNPOのみなさんの力をどうやったらひとつにできるのかを、これから皆さんも、私たちも、役所の人たちもみんな考えていかなければいけないと思います。(柄田)

柄田 これまで3人の先生方からアート、アートと子ども、そしてまちづくりとの関係のお話をいただきました。私はそういうものを行政がどうやって施策として実施しているのかを調査研究することを仕事にしております。

2年前に中野区が「文化芸術に関する懇談会」という会合を開催しまして、私はそこに委員として参加をさせていただきました。そのときに「中野らしさ」ってなんだろうという話になりました。都心に近い割にはここに住んでいる人も結構多いんですね。それと、20代の若者が多く住んでいる一方、20年、30年と住み続けていて、この地域を愛している人も非常に多い。ただ、若い人は中野区からいずれ出て行く。ファミリー層というのでしょうか、ここで子供をもって生活していこうという人は意外と少ないことも数字として出てきています。

それはまちにとって、どうなのでしょう。若い人たちがこのまま中野区に住み続けて、中野区で安心して子どもを育ててゆきたい。そういう人が増えることは非常に大事だと思う。そういう観点から見ると今日のZERO キッズのような活動は大切だと思います。

中野区がお笑いのまちだということをご存知ですか。芸能人、芸能事務所が多い。あるいはサブカルチャーのまち。このフォーラムの会場の下でガラスに姿を映しながら、ダンスをしている若い子たちがたくさん集まっていますよね。公共の文化施設ではとても珍しいことなんです。高校生、大学生、それよりも少し上の若者たちが集まるのは非常に素晴らしいことだと思っています。

そういう風に考えていくと中野はポテンシャルがある地域だと思います。いまはばらばらにあるNPOのみなさんの力をどうやったらひとつにできるのか、ということも、これから皆さんも、私たちも、役所の人たちもみんなで考えていかなければいけないと思っています。

ひとつ、今日の感想ですが、会場に入って来て木が生い茂っている。子どもたちの目線って、低いですよね。都会で暮らしていると、ビルが高くて、天井が高くて、常に上を向いて、先を見て、なにか急かされている気がいたしますけれども、今日、こうやって木が生い茂っている中に座っていると、なにかほっとしますね。こういう時間を大切にしたいと思いました。

持続可能なキッズ・ミュージアムはできるか？

5

2日間だけ、子どもたちはここで表現力を発揮し、自分たちでこれをつくり、お母さん方も協力して、アートの場として中野区のこの施設を自分たちの場とした。しかしそれはあと1時間で壊さねばならない。なぜ、これを1年間、あるいは10年間続けていけないのか。これに対してどう思われるか、パネリスト各氏に意見をうかがった。

自分たちの「基地」って子どもにとって大切ですよね。(大多和)

大多和 私は昭和17年生まれですから、子どものときにはいろいろな木片や葉っぱを集めてきて、自分たちで基地をつくりました。そこは大人が入ってこなくて、子どもたちだけの世界をつくって、食べたり、しゃべったりしてきました。こういう基地は必要だと思う。子どもたちが勝手に使えて、自分たちで決めて、自分たちが片付ける、自分たちで自治できる空間、自治の基地が必要です。

もし、中野区にそういう可能性、使わなくなった公共施設とかあるのなら、ぼくは、さっき目黒さんがいっていた「おじさん、おばさん」の目線で、子どもたちとつきあえる場所として、それを子どもたちに贈りたいと思います。区の懇談会の議論が、そういう方向に行ってくれるといいなあと思います。

なくなるものだからこそその素敵さもあると思うんです。(鳥越)

鳥越 渋谷区で、中野区と同様に現在利用されていない学校を活用することを、区のプロジェクトでやろうとしているんですが、議会とか職員の意識改革だとかなかなか難しい。私はそこで委員として活動もしているんですが、ここではあえて、違う観点からお話したいと思います。

壊さなければいけない施設だからこそむしろ素敵だということもあるんですね。私は音楽をやっていますが、音というのは現象で、そのひと時で消えてしまう素敵さというものがある。浅草の仲見世通りの商店は昔は仮設の屋台だったんです。私の友人が新宿梁山泊という小劇場系の劇団の座付き建築師をやっている。基本的にテント芝居なので舞台や劇場をそのときどき創っては取り壊す。そういうゲリラ的な楽しみというのもありますね。欲張りですけど、仮設もいいけど確かに拠点もあるといい。いつか拠点ができることを確信しつつ、仮設のよさもある、とあえて思います。

むしろ今日は積極的に楽しく壊しましょう。これを創った一年間の事実とか記憶というのは創り手にも残るし、遊びに来た子どもたちにも残っていく。それを積み重ねたところで常設型のミュージアムができればいい。(目黒)

目黒 僕も、ここを壊していいと思います。仕事も恋愛も行政の実務も同じで、つくっては壊しという一見徒労に思えることを続けていくことが、生きていくということであると僕は思う。そして常設型のミュージアムができたときにそれに満足するのではなくて、そこから、一時的で仮設的なものを学校に、美術館に、図書館に、アウトリーチ活動としてやっていってもいいですね。

インターネット上でチルドレンズミュージアムをつくってもいい。今回の映像をインターネット上のキッズミュージアムとして記憶にとどめさせれば、ドキュメントとしてもできるし、心情的なものも含めて、創り手にもお客さんにも残っていくでしょうし。

場を持つということはソフトを持つことだ、という覚悟をすることが必要です。(柄田)

柄田 いま学校の統合など遊休施設がたくさん出ているので、その活用方策を検討する仕事をしています。NPO やアート関係、誰に聞いても場所がなくて困っている。場所があることでいいのは、そこで人の出会いができるのですね。たまり場があって、人が集まってそこから交流が生まれて企画が生まれる。それが非常に良いとよく聞きます。

いま、皆さんがおっしゃっていたことで考えていたのですが、場所があってできることはたくさんありますけれど、やはり場所だけではだめで、それに対してソフトというか、とくに芸術の場合には、その場所のことをいつも気にかけて、その場所にいつも気配りをしている人がいるというソフト、イ

ベントをしていく、情報を提供していくソフトがないといけない。ですから、場を持つことはソフトを持つ覚悟が必要だと感じています。

ボランティア活動の経済的基盤・精神的基盤とは？

～キッズ・ママへの助言とエール～

6

会場からの発言のなかに、パネリストへのこんな問いかけがあった。自治体の経済的援助も限度があり、活動に精力を傾けるお母さんたちのボランティアも限度がある。その時に、どのようなやり方があるのか。各パネリストの経験からのアドバイスが求められた。

コミュニティ・ビジネスとして収益事業をやっていく、ということが考えられます。でもむずかしい問題ですね。（柄田）

柄田 運動を支えていくためには、収益事業が考えられますね。たとえば、私が知っている例では運営主体はNPOで廃校を活用した芸術文化活動なのですが、教室の一部や体育館をたとえば映画の撮影等で貸し出して事業収入が確保できる運営をしています。これはその施設を長期にわたって使用できる条件だからこそできるわけです。でも、その場合収入は幾分は確保できるけれども行政からのバックアップは期待できない。うーん、難しいですね。

一昨年の中野の文化懇談会の時に区民の方と一緒にフォーラムを開催しまして、いいお話がたくさん出ました。そうした話し合いをとにかく繰り返しやっていくほかない。目黒先生がおっしゃったように、とにかくミーティングの場を持つ。行政の方々もはっとする部分もあると思いますし、言葉をつくして私たちのほうから語っていくことがすごく大事だと思います。

私たちは調査研究機関ですので、現場を持っているわけではありませんが、どこの役所でどんな助成金を出しているのか、とか情報の部分でお手伝いできる場所があれば、ぜひさせていただきたいと思います。

ボランティアというのは「つなげる」自発性。楽しいことだと思います。それが犠牲になっていると思ったら続けられないでしょう。（目黒）

目黒 すごく大きなところでいえば税金の直間比率を変える。文化やNPOにお金が集まりやすいような税制にしなくてははいけない。税金問題というのは大変重要なんです。

もうひとつ、行政の良い部分と市民の良い部分とが、どうやったらうまく中野区を魅力的にできるかということが対話できる場、ミーティングの場、ソフトについて考える場所を、僕はつくってほしいと思います。それをいきなり指定管理者制度にして、NPOは頑張りなさいというのは、おかしいですね。

ボランティアについていえば、慶応大学の金子郁容先生が、ボランティアというのは「関係を求める自発性」だという概念を出しています。つまり、人と人、人とモノ、それと空間、その関係をつくっていく。ボランティアというのは奉仕ではないし、犠牲になっていると思っただめだと思んです。僕はボランティアというのはつなげるものだと思っている。その概念は、すごく楽しいと思う。

昔は互助の精神がありましたね。今なら例えば学生の持つエネルギーを活かせないでしょうか。(鳥越)

鳥越 さきほど、アートが昔だったら、お祭りとか、人間の生活にとって本質的なものだったということをしていいましたが、その頃の村や町はお互いに助け合う習慣や制度があった。ZERO キッズの場合は子育てという、人生の中で一番大変な人たちが、一番一生懸命やっている。それは想像するだけでもいかに大変かと思います。

私は大学に勤めていますが、学生などはエネルギーが余っていて、いろいろなことを体験したい時期なんですね。聖心女子大学では学生が自分で企画をし、いろいろな場にボランティアで参加して、戻ってきたら学んだことをきちんと報告するポスターセッションとかをやっていますがとても内容がいいものもあるんです。北川フラムさんも新潟の妻有で北陸でいろいろなアート系の大学生をネットワークして、新潟県の過疎の村々で環境アート展をやっている。こんな辺鄙なところで若い女の子がいて大丈夫かと思うようなところにもたくさんの方が行っている。それを見ていると、みんなが危険をも覚悟しながら助け合うシステムをつくっていかうという気持ちで、ネットワークしなければいけない時代なのだなと思っています。

本当は行政に援助してもらいたい。でもいまの現状ではお母さんたちが頑張らなければ、とんでもないことになる。だから僕にできることは、おかあさんにどうしたら楽しくなるのかというメッセージをどう送るか、ということです。(大多和)

大多和 お母さんが大変なのはわかっているんですよ。でも今はお母さんが楽しんで頑張ってくれなくてはどうしようもないんじゃないかと僕は思っています。そして僕ができることは、お母さんがやりやすくなるために、僕の技術を真剣になって盗んでもらって、それで来年、再来年、その次という

ように、続けていってもらおうこと。

僕は子どもたちに「あなた方が親になったときに、こういうことがこんなに楽しいんだよと自分の子に言える親になってね」といっている。今いっぱい楽しめば、大人になったときにも、こういうことに時間やお金をかけることが全然苦にならないし、そういうことを積極的に評価してくれる親になってくれれば、僕は世の中変わってくると思うんです。

おわりに。

これが子どもたちの居場所づくりへ向けての、私たちの第一歩となるのであれば、今日の話し合いの一番素晴らしい発見だったと私は思います。(中埜)

中埜 今日先生方のお話にあったように、お金があっても場所があっても子どもたちの居場所ができるとは限りません。私たちは子どもたちが本当にほしいものを傷つけることなくそのまま受けれて、そのまま実現することが求められています。そういう場をつくるための勇気だけではなく、ネットワークが必要です。それはお母さんでもあり、お父さんでもあり、NPOでもあり、子どもたち自身でもあります。それらのすべての人が手をつなぎネットワークをつくり上げていく第一歩にしなければなりません。

今日は残念ながら、この会場の木は壊します。でも、私たちの心の中には残しましょう。今日という日を心の中に残して、また、中野区に新しい木を植えようではありませんか。これが子どもたちの居場所づくりへ向けての、私たちの第一歩となるのであれば、今日の話し合いの一番素晴らしい発見だったと私は思います。皆さん今日は本当に長い間ありがとうございました。

チルドレンズ・ミュージアムとは？

今回の「キッズ・ミュージアム」の試みは、「チルドレンズ・ミュージアムを中野に」という ZERO キッズの長期目標へ向けて、2日間だけ仮設で形にしたもの。

目黒氏が運営する実際のチルドレンズ・ミュージアムや、欧米の既存施設については、目黒氏の2冊の著書のなかで詳しく読むことができるが、この日の目黒氏の発言のなかには、チルドレンズ・ミュージアムとはどのようなものか？さまざまな視点からの、示唆に富むヒントがちりばめられていた。以下にそれを抄録する。

リ・デザインで素敵なものにつくりかえる

ある物を探しに旅するうちに、別のものを発見してしまう。それでいいんだ、というこ

とをこどもたちが理解してほしい、と、僕がつくった3箇所のミュージアムですが、ひとつは遊園地、ひとつは動物園、もうひとつは学校が古くなったものを再生しました。リデザイン、リスタート、「リ」というのがこれからの日本で一番大事だろうと思います。まったくゼロからなにかをやるのではなくて、すでにあるものをいかに利用して素敵なものにつくり変えていくか。再生という概念を国もNPOも取り入れていかないと。お金も資源も限界があるわけですから。

扉を開けて、大人はこどもの世界に、こどもは大人の世界へ入って行く

本には表紙があります。表紙を開けると見返しがあって、それを開くと扉があります。つまり、扉を開けると here と there、向こう岸とこちら岸、東西南北、いろいろな道があってその道を体験していく。本ってそういうものですよ。絵本もです。扉を開けることでぜんぜん価値観の違う世界に入っていくんです。僕たち大人は扉を開けてこどもたちの世界に入る。こどもたちも扉を開けて大人たちの世界に入る。そこでどんな世界を見出していくか。その場をつくるのがとても大事だと思う。

話し合い、いろいろなものが生み出される「場」、それがミュージアム

芸術というのは作品ではありません。芸術を生み出す「場」ですね。鳥越さんからテクネーの話がでましたけれども、ミュージアムも同じです。娘たち、女神たちがあつまるその「場」のことを呼んだんです。なぜ、女の人かというところをこどもを生み出す性だからです。こどもを生み出す女神たちが集まって、侃々諤々、喧々囂々、ひたすら話す場所をミュージアムといった。作品を置いてある場所ではないんです。ひたすら話し合うことが音楽やアートや哲学になった。そういういろいろなものが生み出される場をミュージアムといったんです。

大人とこどもが一緒になにかをつくり出していく場所、「自分たちにとって味方と思えるような空間」、そして「計画的につくられるもの」、それがチルドレンズ・ミュージアム。

この空間は自分たちにとって敵ではないな、味方だと思われる空間であることが重要です。やはり、それは計画的につくられなくてはいけない。楽しいことって計画的なものなんですよ。計画的であればあるほど即興ができてくる。あるいは即時的な感性が生きて花開いてくると僕は思っています。

そしてそこで働く大人たちが素敵だということ

こどもたちに教えるだけでなく、こどもたちが感じとらなくてはいけない。共感が素敵である。

そしてまた、そこで働いている大人たちが素敵だということ。それが重要ですよ。ああいう大人に自分たちもなりたいと思うこと。NPOの人たちの働きを、こどもたちはじっと見ていますよ。感じていますよ。

いろいろな大人の居場所でもあるのがいい。

鳥越 私が暮らしている杉並の善福寺にはミニ FM「ラジオばちばち」というのがあって、これはもともと学童保育の保護者たちがはまってしまい、そのままネットワークを保ちたいとミニ FM 局をやっているんです。私は子供がいないので本来学童保育のネットワークには入れないのですが、幼なじみから誘われた。さきほど学生ボランティアの話をしました。母子だけではない、異質のメンバーというか、地域での違った立場の大人も加わって、よい加減で、あまりメンバーが背負い込まずに、大変だったら休んでもいいとかいうぐらいで気軽にやると、人を巻き込みやすいのではないかと思います。

好きなこと、でも世の中の役に立つことなら何をやってもいい。パートナーや親友をたくさんつくって、一緒においしいものを食べればいい。

目黒 僕はこどもたちには、人生ってそんなに長くないから、好きなことだけやって生きてほしい。ただ、その好きなことは、世の中に役立つこと。そうであるなら好きなことをやっていいんだよということを、学校とは違う価値観でこどもたちに伝えたいですね。同時に、自分の好きな異性、好きな同性、自分のパートナーや親友をつくってほしいといいたい。そしてその人たちと一緒においしいものを食べるんだ。大体人生って、その3つくらいにまとめられる。それ以外はあまり考えなくていい。まあ、時間があったら学校行ったり、教科書読んだり勉強したりしてもいいけど、さっきの3つのことが重要だということをこども達に伝えたいな。ただ、君達の神様というのは近道は許さないから、遠回りをしながら、じっくり生きてほしい、という気がします。大人や社会をなめるなよ、ということです。

日本は、こどもの権利条約を10年かけて批准しました。しかし、こどもの結社の自由すらない。こどもが集まったらなにか悪いことをやるに違いないと大人社会は思っているんですよ。大人たちがあまりにも場を用意しすぎるところがある。教育というけれど、こどもたちが自ら育つ場がなかったら、周りの人が育てるというシステムも生まれてこないんで、子どもの可能性を信じて気をつけていきたいと思います。

♪会場からの声♪

会場からの発言も数多くあり、パネリストとのキャッチボールも交わされた。以下はその要旨。

A 場所さえあればそれでいいのかという問題でもなくて、いまおっしゃっていたように、今回のような試みの積み重ねが大変大事なことだと思っています。ぜひ、皆さんの思いがあれば、お手伝いしていきたいと思っています。

B たとえば写真を撮って残しておきたかった風景を、たまたま撮れていなくて、でも実はそのときの情景が非常に心に残っていたりします。ですから、形を残さなくても、自分が非常に心動かされたことは残っていくのだろうなと思っています。つまり形で残っていなくても、ここに参加されたこと、もたちの心の中には今日のことはきっとずっと残っていくんじゃないか、それはうらやましいなと思います。

C うちの近所の例でも、子どもたちがせっかく「基地」をつくらうという気持ちになっても、それを受け入れられない社会がある。だから、子どもたちの気持ちを受け入れられる場所が確保されることはすごく必要だと思いました。おじさん、おばさんの目という話がありましたが、そういう人たちも自分がこどものころは基地づくりをやっていたんですね。

D 中野区では今年度から区民公益活動の助成事業がありまして、その助成金でどんなことをされているのかなと思いついて参加いたしました。中に大きなこのような木がありまして、びっくりしました。会場すべて見てまいりましたが、こういった行政ではできないような自由な活動に区も助成金という形で参加でき、区民の皆さんの役に立てばいいなあと今回つくづく感じました。今回は、資金の援助ということでしたが、先ほどからお話にあったように、場所がないという話がありまして、空いている建物だとか統合されて閉校になった学校だとかをどういった形で生かしていくのかということは区としても考えていかなければいけないと思います。

E 建築の仕事をしておりまして、まちづくりに関心があります。このキッズミュージアムは非常に刺激的だなと思います。実は私は子供の小学校の「オヤジの会」をやっています。その「オヤジの会」を通して感じたことは、コミュニティにみんなが関心を持って、こういう話をもっと根づいてくればいいなということです。オヤジが参加できないと皆さん思われていますが、そうではない。土曜日、日曜日だったら参加できるし、夜ならば地域に居る。だから土曜日に打ち合わせやイベントやるということを考えた。そういうちょっとしたきっかけがあれば参加したいという親父は結構いるんです。

そういうきっかけがあって、学校とかPTAを巻き込んで、うまくやればいいのではないかと考えています。

F 私は行政職員ですが、今日は個人的な意見ということでいいですと、NPO や地域の皆さんがなさっている活動に今回は行政も補助事業という形で参加できたのは大変意義のあることではないかと思っています。こういうところに参加することで職員としても夢を持ちたいなと思っています。こういう活動をしてられる若いお母さん方と知り合いになることで、今後も日常のいろいろなことを話し合える関係づくりを私はやっていきたいなと思っています。

今日会場にうかがって木にお菓子がぶらさがっていますね。私が小学校の時に、図工の時間に好きな木を描きなさいといわれて、私は普通の木ではなくて、お菓子や自分の好きなものを木にたくさん描いたのですね。そうしたときに先生が「こんなもの描いて」と、とても否定的なことを言われた覚えがあります。それが心に残っていて、それを今日は思い出しました。やはり、子どもたちが考えたものを、こんなものはダメだということは子どもをとても傷つける。そこから芽が止まってしまうこともあるし、大人が子どもと一緒にこういう発想を実現して行けるということが大変大事だということを自分のこれからの仕事にも生かして行きたいなと思っています。

G 私は、ZERO キッズの保護者で父親ですが、なかなか参加する機会がありませんでした。今日は参加させていただいて、本当にお母さん方の力は素晴らしい、こんなことができるのに埋もれているのは、もったいないなあと感じました。

場所が使えるだけでなく、お金がもらえるともっとこの活動はよくなるという話が先ほどありましたが、ただお金だけではなくて、いろいろな関わりや助け合いができるのではないかと考えています。私は自分の住む区で子育て支援の活動をやっているのですが、市に場所を紹介していただいたり、広報活動の中でいろいろなPR誌に活動を載せていただいた。そうしたことで、私たちがピラを配るだけではなかなかできないところまで広げることができた。市民と行政の互惠性というか、お金以外にもいろいろなかかわりやメリットが生まれる関係ができればいいなと思っています。

H 私は中野区のM小学校のPTA会員なのですが、M小学校は今年1年で閉校になるわけです。跡地は一年間は保育園の立替のための代替施設に使って、その後跡地利用が動くのですが、跡地を子どもたちがいろいろな活動をできる場にはできないだろうかと考えています。

今日この活動を見せていただいて、大きな希望をいうなら、ここに「こどもの城」はできないかとも考えています。閉校した学校の有効活用というだけでなく、学校だけでは教えられないいろいろな事柄について、このZERO キッズの活動や子どもさんたちに関わって行われている活動がクッション材になって、子どもが大事なことに気がついたり、自分自身の中の芯をひとつ持ってくれば本当にいいなあと思っています。

<プログラム>

- ハッピー!ハッピー!ラッキー!! (詞：ZERO キッズ+佐々木香 曲：谷川賢作)
- 青空の階段 (詞：藤真知子 曲：谷川賢作)
- 見えない翼 (詞：佐々木 香 曲：長倉鈴恵)
- ふるさと (詞：高野辰之 曲：岡野貞一)
- Across the Road (詞：佐々木香 曲：谷川賢作)
- Make a Wish (詞：佐々木香 曲：谷川賢作)

<演奏>

うた：ZERO キッズと仲間たち
ピアノ：谷川賢作
テルミン：鳥音

◇谷川賢作 (たにかわ・けんさく) プロフィール

ピアニスト・作曲家。1960年東京生まれ。ジャズピアノを弘勢憲二、佐藤允彦両氏に師事。79年プロとしてデビュー後、様々なセッションで活動が続ける。現代詩を歌うグループ「Diva」を経て、ハーモニカ奏者続木力と

「パリヤーン」を結成。全国各地でコンサート、ライブを行う。映画・TV等への作曲も数多く、代表作に映画「四十七人の刺客」「竜馬の妻とその夫と愛人」、NHK「その時歴史が動いた」テーマ音楽等がある。最近父である詩人の谷川俊太郎と共に、朗読と音楽の活動も多い。

88, 95, 97年日本アカデミー賞優秀音楽賞受賞。ZERO キッズでは、ミュージカル「海のふ・し・ぎ」「そらのふ・し・ぎ」の作曲を手がけたほか、音楽ワークショップの指導も務める。



■プロフィール■

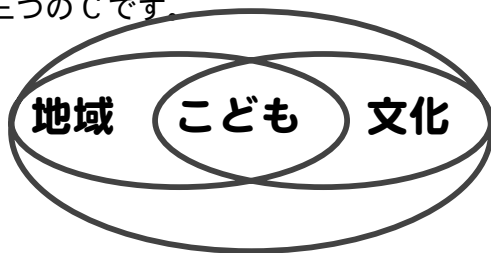
特定非営利活動法人 ZERO キッズ

東京都中野区のなかの ZERO 大ホールの開館記念事業(1993)をきっかけに結成。「そうぞう力(想像力&創造力)」をテーマに、音楽・演劇・ダンス・マイム・造形活動・自然体験などのワークショップにより五感をフルに使って、イメージと感動を表現につなげる教育活動を行う。

2003年にNPO法人の認証を受ける。活動の集大成が3つの創作ミュージカル「森のふ・し・ぎ」(1998)「海のふ・し・ぎ」(2000)「そらのふ・し・ぎ」(2003)。楽譜、CDとなり全国の小中学校で活用されている。2005年第14回音楽教育振興賞(音楽教育振興財団/毎日新聞社)受賞。今後の目標は新たな創作ミュージカル(2009春予定)と、「そうぞう力」を育む教育・文化・ネットワークの拠点としてのチルドレンズミュージアムの構築です。

ZERO キッズのホームページ <http://www.c-c-cnet.org> (C-C-C らんど)

C-C-CのCは、Children(こども)・Community(地域)・Culture(文化)の三つのCです。



Children(こども) **こどものパワーで**
 Community(地域) **地域をつなぎ**
 Culture(文化) **文化をつくる**

連絡先 TEL&FAX 03-5385-9068 info@c-c-cnet.org

<出版物>楽譜:「子どもたちと創る地球ファンタジー海のふ・し・ぎ」「そらのふ・し・ぎ SONG BOOK」(音楽之友社)、CD「海のふ・し・ぎ」(ビクターエンタテインメント)、CD「そらのふ・し・ぎ」「見えない翼」(自主製作)

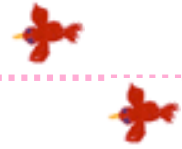


2006 活動より 茨城県常陸大宮市
特別養護老人ホーム「みわ」で交流



文部科学省委託事業 文化体験プログラム支援事業
「キッズミュージアム」でクレイアニメを制作

ZERO キッズの歩み



- 1993年**：中野区民ホールなかのZEROの開館記念区民参加事業
200人の親子で「111匹のねこたちのゆかいな音楽会」開催（なかのZERO大ホール）
- 1994年**：設立、「表現あそび」「こどものためのオペラ銀河鉄道」（なかのZERO大ホール）
「中野区中央図書館開館1周年記念ライブ」出演
- 1995年**：「ゆかいな春の音楽会」（ZERO小ホール）「日本の音みつけた」（芸能小劇場）開催
「音あそび」のワークショップを開始
- 1996年**：「ゆかいな音楽会'96」開催（第二中学校体育館）
- 1997年**：山形県立鶴岡養護学校との交流音楽会「月夜のネコのワクワクパーティー」開催
（なかのサンプラザ）
「続・11匹きのネコ予告編」公演（ZERO小ホール）
- 1998年**：創作ミュージカル 地球ファンタジー『森のふ・し・ぎ』公演（ZERO大ホール）
「演劇ワークショップ」、中野区こどもフォーラム参加
- 1999年**：障害児支援交流音楽会「ふしぎの音のパラダイス」山形県鶴岡養護学校と音楽交流
（杉並ヴァーシティホール）
大人も一緒に「ゴスペル入門講座」開催
- 2000年**：創作ミュージカル 地球ファンタジー『海のふ・し・ぎ』（ZERO大ホール）公演
中野区教育フォーラム参加、中野区教育委員会での地域の教育の事例発表
- 2001年**：CD製作、「Across The Road CD完成記念ライブ」開催（野方WIZホール）
障害児支援交流音楽会「KIDS&ゴスペル深海魚のハートフルライブ」開催
ウェブサイトC-C-Cらんどアップロード（<http://www.c-c-cnet.org>）
コンピュータワークショップ開始
- 2002年**：C-C-C（Children-Community-Culture）ふぉーらむを開始、「想像力・創造力」を育む教育の理論と実践を包括するネットワークを目指す。
「子どもたちとつくる 地球ファンタジー海のふ・し・ぎ」（音楽之友社刊）出版

2003年：特定非営利活動法人の認証を受けて新たな活動の開始

総合的な学習のための劇音楽集「地球ファンタジー海のふ・し・ぎ」のCDをビクターエンタテインメントからリリース
創作ミュージカル「そらのふ・し・ぎ」公演（ZERO 大ホール）

2004年：東京都人権擁護委員会主催人権作文発表会で「そらのふ・し・ぎ」上演

小学校春の合唱指導セミナー、小中学校夏の合唱指導セミナーに講演と実演
ウクライナのハリコフ子どもバレエ団と文化交流会開催（Bumbu）
「そらのふ・し・ぎ SONG BOOK」（音楽之友社）出版
文部科学省委託事業「地域子ども教室」「家庭教育支援推進事業」に事業協力

2005年：音楽教育振興賞顕彰部門受賞（音楽教育振興財団／毎日新聞社主催）

夏の合唱セミナー出演（谷川俊太郎・賢作親子と共演）
「そらのふ・し・ぎ」レコーディング（クラブチッタで）、CDリリース
茨城県美和村で星空合宿
音楽教育振興賞受賞記念公演「Space ファンタジーそらのふ・し・ぎ 2005」公演
文部科学省委託事業「地域子ども教室」「家庭教育支援推進事業」に事業協力

2006年：第39回全国子ども会育成中央会議・研究大及び全国子ども会子どもが主人公の居

場所づくり推進研究大会において講演と実演（オリンピック記念青少年センター）
文部科学省委託事業「家庭教育支援推進事業」に事業協力、
文化庁文化体験プログラム事業でクレイアニメのワークショップを開催
茨城県常陸大宮市と地域間交流（やまびこ合宿）、日本の歌で世代間交流
中野区公益活動助成事業として「こども・まち・アート」交流見本市「夢のキッズ
ミュージアム 2007」を開催、チルドレンズミュージアムの具現化に向けてネットワ
ークづくりに着手

